

Title	マルクシズム前史：正義者同盟の建設よりマルクス、エンゲルスの加盟まで
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.1 (1928. 1) ,p.63- 138
JaLC DOI	10.14991/001.19280101-0063
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280101-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルクシズム前史

——正義者同盟の建設より
マルクス、エンゲルスの加盟まで——

平井新

目次

- 一、正義者同盟の成立及組織。
- 二、同盟本部巴より倫敦に移る。
- 三、同盟内部に於けるインタナショナル精神の發達。
- 四、一八四五年二月—四六年一月共産主義労働者教育俱樂部に於ける同盟綱領の討議。
- 五、マルクス及びエンゲルスの出現。
- 六、正義者同盟マルクスに傾く。
- 七、マルクス、エンゲルスの加盟。

一 『正義者同盟』の成立及組織

亡命者同盟内部に於ける、國粹的共和的要素と新興プロレタリア要素との思想的軋轢のは目を逐ふて激しきを加へ、遂に一八三六年に到り、全會員約五百名の中、後者に屬する四百餘の會員は相

率ひて脱退し、爰に同盟は一八三四年の創立以來纔に三年にして分裂するに到つた。^①分裂後同盟は萎靡として振はず、一八四〇年頃官憲が獨逸支部の所在を嗅ぎつけた頃は、雷だ空しき形骸を止めてゐるに過ぎなかつた。

之に反して、同盟脱退者は急進派の領袖 Wilhelm Schuster を中心に同三六年、同じく巴里に新に秘密結社を組織することとなつた。而して此秘密結社は亡命者同盟の不振なるに反して急速の發達を遂げるに至つた。『正義者同盟』、Der Bund der Gerechten、La fédération des justes、即ち是である。

正義者同盟は思想上にも組織上にも Babeuvismus を踏襲した。即ち同盟の目的は半ば宣傳團體たると共に陰謀團體であつた。勿論當時の佛蘭西では斯種の團結は許されなかつたので自然秘密結社の形態を採る外はなかつた。曩に亡命者同盟が佛蘭西の『人權結社』、la société des droits de l'homme に倣つた如く正義者同盟は、組織、綱領共に Blaquy, Barbès の率ゆる『四季結社』、la société des saisons に摸し、宛も事實上、四季結社の獨逸支部たるの觀があつた。^②

同盟の組織は用語の差違は別として少くとも形式に於いては全く『四季結社』の同一であつた。Arnold Ruge は、Zwei Jahre in Paris 2 Bde. 1846 の中、之に關する消息を傳えてゐる。其れに據れば會員十名を以て一個の „Gemeinde“ を造り、各 „Gemeinde“ の代表者十名を以て „Gau“ を作り、各 „Gau“ は夫々一名の代表者を „Halle“ に送る。„Halle“ は „Vorstand“ 及び „Beistand“ を選出し、全 „Halle“ の „Beistand“ が集つて一個の „Beihalle“ を作る。„Vorstand“ は精神

上の指揮權を握り、„Beistand“ は同盟の統制を行ひ、„Beihalle“ は財政、及び秘書事務を司り、同盟内部の紛争に際しては名譽裁判に依て調停するの任務を有する。^③従來 „Vorstand“ に對しては絶対服従の義務が存したが爾後選舉に依て任命される事となつた。全體として組織は亡命者同盟の嚴肅なるカルポナル的組織に比して遙かに民主的となつた。

同盟の規約は保存されてないために不明である。併し乍ら同盟の原則は『四季結社』のそれと同一であつた。其れに據れば、政治的革命のみでは不充分である、特權を打破するに非ざれば無爲である。共和國のみが唯一の正しい政府である。何となれば共和政治のみが平等の上に礎れたものであるから。又共和政體のみが萬人に平等の義務を課し、平等の權利を附與するものであるからである。而して其義務とは一般意志に對する服従、祖國に對する貢獻、國民に對する博愛である。次に其權利とは(一)生存權(二)教育權(三)選舉權、被選舉權即ち之である。^④

斯の如く同盟の原則は理論上には頗る明白であつたが、實際上に於いて其解釋は必ずしも同一ではなかつた。之がため同盟内に軋轢起り、爰に同盟は „Ebenistes“ 派と „Tailleus“ 派との二派に分れることとなつた。前者は共和政體を唱へ之に依て道德的教育及び奴隸制度の廢止を求めた。後者は Weiting と共に基督教を遵奉し、神秘を政治に覓め、全く國家を度外視して、直接の神秘的解放を考へた。國家は恰も最初の基督教徒に依て世界が廢止された様に、撤廢さるゝであらう。彼等の見解に依れば、共產社會は決して國家で無い事恰も教會や教職政治が基督教徒の考では國家でないと同様である。兩派の軋轢は遂に破れて „Tailleus“ 派が勝を制するに到つた。^⑤其結果 Weiting の

勢力は次第に大となり、遂に一八三八年、同盟は Weiting に同盟の新綱領起草を委嘱した。而してこの委嘱に應じて著はしたものが彼の處女作、Die Menschheit, wie sie ist und wie sie sein sollte、⁽⁹⁾である。本書の形式は著しく宗教的社會主義者 Lamennais の感化を表はし、其内容は批評的空想的社會主義特にフリエエの影響を強く現はしてゐる。同盟會員は本書の頒布に献身的の勞を惜まず、多額の出資をして之を秘密出版し約二千部を獨逸手工業者の間に頒布した。此事實に徴して、ワイトリングの思想が既に同盟内に深く浸潤してゐた事は明白である。彼は又プロレタリアの階級闘争の根據地たる結社は同時に將來社會の母體とならなければならぬとの見解から、巴里在住の裁縫職人の爲めに共產主義的食堂を建設した。⁽¹⁰⁾

同盟中の有力者としては前記、Wilhelm Schuster, Wilhelm Weiting の他に Karl Schapper, Germain Maerer, Hermann Ewerbeck, Heinrich Bauer, Joseph Moll 等があつた。

Karl Schapper は Nassau の Weiburg に生れ、一八三二年、未だ、ギイセンの林學生の時 George Büchner の陰謀に加はり、⁽¹¹⁾ 更に一八三三年四月三日フランクフルト事件に連坐し、投獄せられたが逃れて瑞西に到り此地で麥酒醸造人となつて糧を儲け、一八三四年二月、有名なるマツチニのザヴォア襲撃に参加せしため再び瑞西を追はれて巴里に移り植字工として生活を営んでゐた。エンゲルスは彼を評して曰く『果斷にして精力旺盛なる偉丈夫、ブルジョワ的存在と生活を嗜する覺悟を有する彼こそは既に三十年代の活躍の示すが如く眞に職業的革命家の典型である。彼の思索は聊か鈍重の趣はあつたが、去りて決して理論的洞見を缺いて居たと云ふ譯ではなかつた。此事は彼

が自ら煽動家の非を悟つて共產主義者になつたのに徴しても頷かれる。彼は又一度得た自分の考を頑強に固執した。彼は其故に自己の革命的情熱を理性に依つて押し通ふさうとした。併し乍ら彼は後で直ぐ自己の非を悟つた。彼は圓滿な人間であつた。彼が獨逸労働運動の建設に盡した業績は決して忘れる事は出来ない』と。⁽¹²⁾

Joseph Moll はギョレン生れの時計工であつた。エンゲルスは彼を評して言ふ『中背のヘルクレス、精力と果斷は Schapper, Bauer に遜色無く、而も精神的には是等兩人に優つてゐた。彼の多くの使者としての旅行の結果にも分る通り、生來の外交家たるのみならず、亦理論的洞見にも疎くなかつた。自分は一八四三年是等三人と倫敦で相識ることとなつた。彼等は自分が識ることを得た最初の革命的プロレタリアであつた。又當時吾々の見解は互に相違してゐたが——何となれば彼等の狹量なる平等共產主義に對し自分は聊か狹量なる哲學的優越を持つてゐたから——而も尙ほ自分は、當時やつと一人前にならうとしてゐた時に當て是等眞實なる三氏から受けた感激的印象は決して忘れることは出来なう』と。⁽¹³⁾

Heinrich Bauer はフランクゲン生れの製靴工で、元氣で、快活で、奇智に富み、其倭少なる體軀の中は狡猾と果斷の精神に充ち充ちてゐた。⁽¹⁴⁾

Germain Maerer 學士は嘗て伯林の教授で、共產主義のために彼獨特の詩才を傾けた。⁽¹⁵⁾

(1) 拙稿「共産黨宣言」前史の一齣(三田學會雜誌第二十卷六號)参照。

(2) Arnold Ruge は分裂の原因を絶對服従を強ふるカルゲルの組織に在るさなしてゐる(Arnold Ruge, Zwei Jahre

in Paris I. Bd. S. 338) 又 Wilhelm Weitling は分裂の原因を同盟指導者の名譽慾に在るをなして其理由に同盟には未だ社會主義的傾向の存するところを指摘してゐる (Wilhelm Weitling: Garantien der Harmonie und Reichth. Jubiläumsgabe s. X-XI) 彼の見解は誇張に失つてゐる。蓋し雜誌「命令」に現はれし諸論文は程度の差こそあれ何れもプロレタリア的傾向を有してゐる。要するに Ruge の見解と Weitling の見解も共に分裂の一端を説明してゐるに過ぎないのであつて其主因は勿論思想上の相違に基つてゐるに非ざるべからざるであらう。

(22) Grünberg, Die Londoner Kommunistische Zeitschrift und die andere Urkunden aus den Jahren 1847-1848. 1921. s. 6.

Andler, Le Manifeste Communiste de K. Marx et F. Engels. II p. 21.

Engels, Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten. Marx, Enthüllungen über den Kommunistenprozess in Köln. s. 30.

(4) Kaler, Wilhelm Weitling, seine Lehre und Agitation. s. 24.

(5) Arnold Ruge, a. a. O., s. s. 339 ff.

(6) Charles Andler, op. cit. II. p. 22.

(7) Arnold Ruge, a. a. O., s. 340-341.

(8) Weitling の思想、運動に關する研究は後日發表の考である。

(9) 本書に關する詳細の研究は後日發表する積りである。

(10) Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. I. Bd. s. 103.

(11) 此點に關して Mehring は異論を差し挿入する。彼曰く Schapper が Büchner の陰謀に参加せしむる所説は誤謬に基く。何となれば Schapper がフランクフルト事件に参加し後獨逸を遁れし時、Büchner は Strassburg の學生で未だ政治運動に加つて居なかつた。而して Büchner 及 Darmstadt に自ら秘密結社を指揮せし時、Schapper は明かに瑞西に住つてゐた。又 Schapper 及 Mazzini の Savoyer Zug に参加せし言はれてゐるが如きは彼自身を定してゐる。(Mehring, a. a.

O., s. 381. Mehrings Anmerkungen in „Enthüllungen über den Kommunistenprozess in Köln von Marx. s. 145).

(12) Engels, Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten. Enthüllungen über der Kommunistenprozess in Köln von Karl Marx. s. 30-31.

(13) Engels, a. a. O. s. 31.

(14) Karl Gutzkow, Briefe aus Paris. 1842. 2. Teil. s. 127.

二 同盟本部巴里より倫敦に移る (一八四〇年)

ワイトリングの共產主義の浸潤と共に、正義者同盟は單なる陰謀主義の非なるを既に悟つてゐたが、實際上には、七月王政のために出版並に結社の自由が禁壓されて居たために、尙ほ依然として、陰謀團體として止り、『四季結社』に援助を仰いでゐた。

一八三九年五月十二日、Blanqui, Barbès の四季結社が、巴里に革命的陰謀を企てるや、正義者同盟も亦之に参加した。併し乍ら四季結社の陰謀は大事に至らずして同日鎮定せられ、Blanqui, Barbès は投獄せられた。正義者同盟も亦其犯の廉を以て直に解散を命ぜられ、同盟の有力分子は、或は捕縛せられて投獄の厄に遭ひ或は逸早く難を遁れた。Schapper, Bauer は稍々久しき禁錮の後、罪狀不充分のため佛蘭西退去の條件で放免せられ、Moll は逸早く難を遁れて英國に渡つた。

放免後 Schapper 及 Bauer は英京倫敦に渡り、Schapper は此地で語學教師となり、Bauer 及び同じく此地に来れる Moll と共に只管、四散せる同志の糾合に力めた。倫敦では、巴里、瑞西に比して結社、會合の自由も保證されてゐたので、彼等の運動にも極めて好都合であつた。一八四〇年

二月七日、彼等に依て公認獨逸労働者教育俱樂部 „Der öffentliche deutsche Arbeiter-Bildungsverein“ が建設せられた。此俱樂部は正義者同盟の募兵地の役割を務め、且最も有力なる俱樂部會員は殆んど常に共産主義者であつたから、其指揮権は自然、同盟の手に歸した。同盟は倫敦に多數の „Gemeinde“ (當時又 Hütte とも呼ばれてゐた) を數ふるに至つた。教育俱樂部は應て二個の俱樂部に分たれ一〇は Westend (191 Drury Lane, High Holborn) に本部を置き、他は Ostend (Castle, Goodman's-Style Whitechapel) に本部を置いた。一八四六年末には約五百名の會員を有するに到つた。⁶⁾

斯の如く同盟の外に募兵地として労働者俱樂部を作る二重組織は、若し法律に依て労働者俱樂部を禁壓された場合に聲樂會、體育俱樂部の形式で其目的を果すためである。相互の連絡は大部分、絶えず來往する會員に依て果され、又必要に應じて密使の役目を務めた。此意味に於いて政府が危険分子の追放を行ふことは同盟には却て幸であつた。何となれば彼等に依て、連絡と密使の務めが果さるゝ事になるからである。⁶⁾

斯くて一八四〇年以來同盟の中心地は倫敦に移て仕舞つたのである。

同盟分散後の巴里では Weiting が四散せる同志を糾合して再興を計つたが、四〇年の夏、彼が同盟より瑞西宣傳の使命を帯びて、巴里を去るや、Ewerbeck 之に代て巴里正義者同盟の指導に任ずる事となつた。

Ewerbeck は、平和的宣傳、明瞭なる真理の力、及び人類の道德化を提唱する Etienne Cabet の共

産主義を奉じ、カベエの Voyage en Icarie. Wie ich Kommunist bin. Mein kommunistisches Glaubensbekenntnis ⁶⁾ の諸作を翻譯してカベエ主義を鼓吹した。之がためカベエの共産主義は全く同盟を風靡するに到つた。同盟の中心要素は裁縫職人であつた。職業用語としては獨逸語が廣く使用せられた。一八四七年には巴里の „Gemeinde“ の中には主として裁縫職人の組織するもの二、家具師の團體一つが組織された。

ワイトリングは瑞西に移つて以來、August Becker, Sebastian Seiler, Schmidt の同志を得て先づゲントに正義者同盟を作り、共産主義の宣傳に努めたが其間終始、倫敦の Schapper, Ewerbeck と連絡を怠らなかつた。⁶⁾ 一八四三年ワイトリングは捕縛せられ翌年獨逸に護送せられた。此時以來、同盟の中心は事實上倫敦に移つた。

獨逸でも一時は多數の支部が出来たが、當時の國情に禍されて何れも永續しなかつた。そして七年後一八四六年末官憲が Berlin, Magdeburg を搜索した時には纔に片影を認めるに過ぎなかつた。⁶⁾

(1) Grünberg, a. a. O., s. 7.

(2) Engels, a. a. O., s. 31-32.

(3) 是等の著作は何れも Dr. Wendel-Hippler なる匿名の書かれたものによる。Georg Adler 及び D. Wendel-Hippler の本名は Allhusen による。Geschichte der ersten sozialpolitischen Arbeiterbewegung in Deutschland, s. 125-126) が、之を譯すべし。Ewerbeck の著 „Deutschland und die Deutschen 1851“ の裏面に在る彼の著書目録の示す所を見し。明白なる。(Kaler, Wilhelm Weiting seine Lehre und Agitation 1887, s. 40 ff.)

(4) 拙稿「瑞西時代のホルヘルム・ワイトリング」三田學會雜誌二十一卷三號參照。
(5) Engels, a. a. O. s. 33:34

三 同盟内部に於けるインタナショナル精神の發生

— 獨逸本位の組織より國際的組織へ、

巴里より倫敦移轉後、同盟内部に現はれた特筆すべき變化は、本同盟内部に於ける從來の狹隘なる民族的精神の褪色と、之に代るインタナショナル精神の發生、換言すれば組織上に於ける獨逸主義より國際主義への轉化であつた。固より斯る變化は徐々として長日月の間に成就されたのであるが一八四四年頃よりマルクス、エンゲルス加盟直前に到る時期に於いて愈々その然たる證徴を示してゐる。而して此變化は専ら當時に於ける英國社會狀態殊に無産階級の最初の組織的政治運動たるチャアティズムの影響であると云つていい。

インタナショナルナルの精神は先づ一八三〇年代の英國で呱呱の聲を擧げた。近世資本主義的生產方法が逸早く其緒に就きプロレタリアとブルジョワジイの社會的疎隔が最も早く、而も劃然と發達した英國が獨佛に比して、此精神の發生に遙かに有利なる温床となつたのは自然の數である。一八三〇年乃至四〇年代はプロレタリアの最初の組織的政權獲得運動として知らるゝチャアティズムが全英國を席卷した時代であつた。事實此時代に於いて英國のプロレタリアの胸中には階級意識の成長と共にインタナショナルナルの感情インタナショナルナルの觀念が萌してゐた。之と殆んど時を同じうして佛蘭西を初め波蘭等の歐羅巴諸國は革命的運動や革命に見舞はれ、是

等の革命運動に挫折した諸國の亡命客が相前後して續々と英國に遁れた。是等の事實が英國の無産階級にインタナショナルナルの精神を親炙させる事となつた。例之一八三〇年の始、英國に於ける最初の而も最も有力なるプロレタリア出版業者 Hetherington の編輯する雑誌 Penny Papers 後の Poor Man's Guardian の如き其紙數の過半をば、外國事件の報道、及び論評に割き、或は波蘭の獨立を祝し、或は葡萄牙反革命の暴擧を難じ、或ひは七月革命第一周年祝祭を發起した。而して是等諸外國に於ける解放戦争に對する英國プロレタリアの同情には既にプロレタリア的性質が濃厚に現はれてゐたのである。(2)

一八三〇年代より四〇年の終にかけて新救貧法反對運動、チャアティズム等英國の無産階級は自己の政治的解放運動に忙しかつた。併し此多忙中に在つても決して諸外國問題の推移を閑却する事は決して無かつた。當時チャアティストの重要な機關雜誌 Northern Star の第一面は相變らず Foreign Intelligence の標題の下に諸外國の事件を論評した。一八三八年 Julian Harney の設立した Democratic Association は當時既に倫敦在住の諸外國亡命客と極めて親密なる關係を結んでゐた。亡命者の群は或は委員會、俱樂部を組織し、時には自國の解放日を祝し、或は又チャアティズムの實際運動にも參加した。彼等が國際的感情の發達に貢獻した點は決して少くない。

一八四四年八月ワイトリングが倫敦に來たるや、翌九月二十二日、英、佛、獨の共產主義者は彼のために盛大なる歡迎會を催した。社會主義音樂團の合唱と管絃樂は當日の興を一段と添へた。此の間に在て社會主義國民協會長 Clarke, New Moral World の主幹 Fleming 佛蘭西勞動者俱樂部代表

Chillman、獨逸共產主義俱樂部代表 Schapper 等は交々起て彼のために熱誠なる歓迎の辭を述べたが總て是等の演説の中には何れもインタアナシヨナルの精神が強調されてゐた。此會合は實に各國の社會主義者が一同に會して社會主義の同胞提携の精神を發揮した最初の國際的會合であつた。翌四五年に入つて此傾向は更に著しい進捗の跡を示してゐる。九月二十二日、佛蘭西第一共和國建設を紀念するため英國のチャアティスト主催の盛大なる國際的紀念祭が行はれた。會するもの獨逸人、佛蘭西人、伊太利人、西班牙人、波蘭人、匈牙利人、土耳其人等で、チャアティストの領袖 Thomas Cooper が司會した。チャアティストの機關雜誌、Northern Star の主幹 Harney、佛蘭西共產主義者 Berier-Fontaine, Moll 及びワイトリングが夫々祝辭を述べ最後に各國の革命歌を高唱した。ワイトリングは大要左の如き演説を試みた。

『此會合は人類の胸中に燃焼してゐる共通の感情即ち同胞愛の感情に對する一表徴である。然り、縱令、此共通の感情を相互に伝えるために、吾々の教育の結果として種々の人を要するといへ、又此感情の交換が言語の相異に依て妨げらるゝとは言へ、幾千の偏見が吾々の共同の敵のため結合せられ、利用せられ、その結果、意志の疏通、普遍的同胞愛が促進せられず寧ろ妨げられてゐるとは言へ、是等の障壁は決してこの力強き、愛情に高む感情を消滅せしむる事は出来ない。此感情こそは惱めるものをその惱める同志に、よりよき状態のために戦ふ戦士を其戦友に結びつける所のものである。……』と最後にワイトリングは乾杯して謂ふ、

『青年歐羅巴のために。萬國の民主主義者よ、過去の嫉視反目をかなぐり棄て、同胞のフアラシクを組織して専制主義の破壊、平等の一般的勝利に邁進せよ』と。

同年の末頃チャアティズムの首領 Feargus O'Conner の發起で、通稱、Orator 或は、Peterloo 虐殺の英雄と呼ぶ、Henry Hunt の誕生日を祝した。Schapper, Weiting は「萬國の民主主義萬歳」と叫んで乾杯した。同一月に波蘭移民俱樂部は一八三〇年反亂の闘士 Oberst Oborski の發起で二十年前刑死した十二月黨員追悼文起草した。チャアティスト、佛蘭西社會主義者、マツチニ旗下の青年伊太利の中央委員會も亦此の追悼文に署名した。

之より曩、四四年の終頃、獨逸人、伊太利人、波蘭人の間に、萬國民主主義者の會合所たる可き、國際的組織建設の氣運が熟し、翌四五年の初、Schapper 及び波蘭人 Oborski の斡旋で、The Democratic Friends of All Nations が設立された。本團體の主なる目的は各國民に同胞的感情を馴致するに在つた。此目的を促進するために定時の會合を催して會員相互の親睦を計り亡命者に對して援助を與へた。會員は主として佛蘭西、獨逸、波蘭の亡命者に少數の急進的な英國人であつた。⁽⁵⁾ 同盟組織の國際化に最も深き影響を與へたものは、Fraternal Democrats であつた。前述の佛蘭西第一共和國建設紀念祝賀會の席上、Julian Harney は豫て倫敦在住の各國民民主主義者が互に面識接觸の機會乏しく、各國の狀態に疎く動もすれば欺瞞的なブルジョワ新聞紙の報道を信賴するの傾あるを遺憾とし各國の社會主義者を網羅すべき國際的團體組織の急務を當日の參會者に慫慂したが、直ちに容るる所となつて同年末成立したのが此の、Fraternal Democrats であつて労働者階級の最初の國際的組織、或る意味に於いて第一インタアナシヨナルの先蹤であると言はれてゐる。

る。

„Fraternal Democrats“ の根本思想は一八四六年二月 Harney が倫敦正義者同盟の募兵地たる獨逸労働者教育俱樂部創立第六周年紀念祭の席上で試みた講演の中に最も明白に窺れる。曰く

『民族主義は過去に於ては必要であつた。民族主義は人類を一般的、永久的隷屬状態から救済した。現代に於いても多數諸國の民族的精神の覺醒は是等諸國の生活を鼓舞する手段として無くして叶はぬものであつた。波蘭、伊太利の場合は、民族主義の精神が覺醒せられて有益なる結果を齎らした。併し予は波蘭人、伊太利人に對して、單に露西亞、埃太利の束縛から解放される事のみが吾人の要求の全部ではない事を知らしめ度い。吾人は一八一五年神聖同盟で伊太利代表の提唱した様な伊太利帝國を要求しない。吾人の要求するものは此兩國に於ける民族の主權、民族の教育、少くとも民族の社會的進歩の端緒である。此社會的進歩が増大されて、應て、民族は自己を支配する主人を持つ事無く、抑壓者に妨げらるゝ事無く、自己の労働の果實を享得する事が出来る。英國、佛蘭西の如き諸國に於いて何等民族的精神を刺激するを要しない、寧ろ之と反對に英佛兩國に於ける正義の士の總ての努力は過去に於いて民族的精神の野蠻なる獎勵が齎らした偏見の殘滓を根絶するに向けなければならぬ。予は萬國の被抑壓階級が共同の目的のために相互に團結せん事を要求する。『分割、支配』は從來、抑壓者の合言葉であつた。『團結して勝利せよ』は吾々合言葉であらねばならぬ。波蘭人、露西亞人、普魯西人、匈牙利人、伊太利人を互に引き離してゐる民族的差違は縱令何であらうとも、是等の民族的相違は露西亞、埃太利、普魯西の專制君主が相互に提携して自家の壓制政治を維持する

のを妨げはしなかつた。而らば是等諸國の國民は自己の自由を獲得するために何故團結すべきではないか。萬國々民の問題即ち労働、隷屬的被搾取的労働の問題は同一である。少數者の壓制、多數者の隷屬状態は各國によりて夫々異なるも、而も根本的傾向に至つては同一である。何れの國に於いても小麦を作る人々は馬鈴薯で生活してゐる。家畜を營む人々は一片の肉すら口にしない。葡萄を栽培する人々は芳醇なる葡萄酒の渣滓しか得られない。衣服を製造する人々は襤褸を着てゐる。家を建てる人々は陋屋に棲む。總ての必需品、娯樂品、贅澤品を製造する人々は貧乏に沈淪してゐる。愁訴苦難は萬國労働者を通じて同一ではないであらうか。彼等の利益も亦同一ではないか。手段に對する見解は何れも相異せるかも知らぬ、又事情に依て止むなく手段を異にするかも知らぬ、併し、大なる窮局の目的、人類の眞實の解放といふ目的は總てのもののものであり照準點でなければならぬ』と。

獨逸労働者教育俱樂部が彼の高調した國際的精神に深き感銘を受けたことは想像に難くない。„Fraternal Democrats“ の『總て人類は同胞なり』との標語はシャツバアの示唆で其儘前記俱樂部の標語とされた如き此間の消息を物語るものである。

以上述べた如き各種の國際的會合、國際的團體の影響を受けて獨逸労働者教育俱樂部の組織、精神も當然變化した。會員の如きも從來殆んど獨逸人に制限せられてゐたが今や露西亞人、スカンデナヴィヤ人、和蘭人、匈牙利人、チエツコ人、ロシヤ人、南部スラヴ人、エルザス人等が加入する様になつた。四七年には英國の近衛擲弾兵すら出入する様になつた。俱樂部の名稱も共產主義労働者教育俱

樂部を改めらるゝに到つた。⁽⁶⁾斯くて俱樂部の國際化が又其母體たる正義者同盟の上に影響を與へた事は論を俟たぬ。一八四七年九月、「共產主義新聞」校正刷の冒頭を飾り、後、共產黨宣言を結んだ「萬國のプロレタリアよ、團結せよ」の標語に概括さるゝインタアナショナル精神は後年マルクス、エンゲルスの加盟、影響を俟たずして夙に明白に發達してゐたのである。

(1) Th. Rohnstein, Aus der Vorgeschichte der Internationale. s. 2-3. Ergänzungshefte zu „Neuen Zeit.“ Nr. 17. 19. 3.

14.

(2) a. a. O., s. 3.

(3) Adler, a. a. O., s. 80-81.

(4) Adler, a. a. O., s. 81-82.

(5) Hermann Schiffer, Die Chartisten-Bewegung. Ein Beitrag zur sozialpolitischen Geschichte Englands, 1916. s. 184. Rohnstein, a. a. O., s. 4. 5.

(6) Rohnstein, a. a. O., s. 4-5.

(7) Rohnstein, a. a. O., s. 9.

(8) Engels, a. a. O., 3. Grönder, a. a. O., 10-11.

四 一八四五年二月—四六年一月、倫敦共產主義労働者教育俱樂部に於ける同盟綱領の討議。

同盟組織の國際化、即ち同盟内部に於ける國際的精神の成長と共に、他方殆んど時を同じうして同盟の信奉する思想的基礎にも亦根本的動搖が行はれつゝあつた。這間の消息は一八四五年二月乃至

四六年一月の間に同盟綱領討議の席上 Schapper, Moll, Bauer, Pfänder, Dengler, Kriege, Weiting 之間に交はされたる討論應酬の裡に明瞭に窺ふ事が出来る。議論は大體 Schapper, Moll, Bauer, Pfänder, Dengler の一派と Weiting, Kriege との二派に別れ、結局前者が後者を壓倒する事となつた。之を他面より考ふれば、從來久しく同盟の信奉したワイトリングの平等共產主義が漸次一掃せられて、現實社會の状態の認識に基礎を置く Schapper 一派の比較的科學的且つ合理的見解が同盟の信奉思想に置換へられた。此意味に於いて本討議の詳細は唯單に同盟の根本思想變遷の跡を物語るのみならず又マルクス、エンゲルス加盟直前に於ける同盟の思想的背景を示すものとして吾人の極めて重要視する所以である。以下討議の模様を稍々詳細に述べる事とする。⁽¹⁾

(問題、一) 人間は自己に關して、何を善と呼び何を惡と呼ぶか(四五年二月十八日最後の議題) シツパア、—自然は善であつて現今行はれてゐる禍殃に責任は無い。其故に自然の齎らす總てのものは當然善でなければならぬ。従て人間も亦善である。人間が自然法に準じて生活せる間は、調和は地上を支配した。併し乍ら人間が自然を征服せんとするに到り、又人間が惡意からでは無く、無智のために私有財産を發明して以來、人間の幸福は消滅し、恐る可き不調和が之に代つた。パウエル、—自然法に離れる事は何れも不正である。

決議された答—總て人間の肉體的、精神的發展を促がすものは善であり、之に反するものは禍である。

(問題、二) 現行社會に於ける缺陷を改善する可き點如何(二月廿五日乃至四月一日)

デングラア——自然は此地上の調和を欲してゐる。其故に總ての動物に夫々特殊の性能を與へ、人間をも窮乏に陥る事ならしめる。併し乍ら人間はその自然の領域から離れ、少數のものが他を支配し、他の者は卑屈にもその支配に堪へてゐる。今初めて人々は眼を揚げてゐる……

此問題に關して、Weiting, Schapper, Pfänder, Bauerは、涯し無い議論をした。

(問題、四) 從來の共產主義は、何時、何處、何れの形態に於いて救済手段として提議せられ、且つ應用されたか。(四五年、四月廿四日乃至五月十三日)

此議論の中心點は、共產主義の實行は小規模に俟つべきか、或は植民地か國家か亞米利加か歐洲に一般的に實行すべきかであつた。

シャツバア——吾人は異國に移住すべきではない。此處歐羅巴で宣傳せよ——此れが目的に到達する所以である。若し吾々が共產社會に生活しても人類の得る所は何物も無い。原始基督教徒は何に依て増加したか。彼等が諸國にその教義を普及したからである。

レヘマン Lehmann は反對して謂ふ——住居を建てるために沼を埋めるのは何故であるか。直ちに堅い土壤に家を建てないのか。國の法律に制限無く、人類が此の貴き目的のために、彌が上に榮へる事の出来る、かゝる土地に何故に家を建てないのか。何等の金銭的資格の制限無く、何人も自由に入會の出来る植民地こそ望ましい。

パウエルは宣傳を頼みにして謂ふ、——各自銘々が年々十名を教化すべきである、今日此處彼處を旅行して、此思想を普及すべきである。吾々は既に到る處で効果を收めてゐる。嚴密に言へば財貨共有社會は尙全く存在しなかつた。此種のもので成立すべく思はれたものすらも没落しなければならなかつた。何となれば人權に基礎を置いて居なかつたからである。

シャツバア、——亞米利加の森野に植民地を建設するのは極めて困難である。植民地は必ずや、精神的糧の缺如に悩まなければならぬ。吾々は此地にゐる事が必要である。何となれば大戦争は將來、亞米利加でなく、此地で始まるであらうから。

パウエル、——原理を仔細に涉て實現する事は必ずしも必要ではない。又それは極めて難事である。宣傳の方法に依てのみ吾々は最も速かに目的に到達する事が出来る。

クライゲ、(五月十二日初めて此會合に出席して、シャツバア及びワイトリングの斡旋に依て爾後會員となる)——人間生活には終生、追放の憂目に遭ふ色々な事情が存する、是等の人々には救済が必要である。そして此れは決して單なる一例であると思つてはならない。吾々は共產社會に於いて一層幸福となる。吾々と行を共にする人々は誓約すべきである」と。之に對してシャツバアは注意して謂ふ、——クライゲ君の言はれる所は全く立派である。一八三四年亡命者が瑞西に行つた時、懇ろに歓迎された。併し乍ら、惡漢や怠惰者や詐欺師共が來て亡命者を裝ふたために墮落した。亞米利加の植民地にも亦同じ事が行れるであらう。

(問題、五) 共產主義がこれまで實現されなかつた原因は果して何か(四五年五月十九日乃至七月)パウエル、——其故に今日迄發生した共產社會は決して共產主義的のものではなかつた。何となればそれは少數の人々に依て建設せられ、指導されたからである。

ワイトリングはパウエルを駁して謂ふ、——凡そ一家族と雖も共產社會に生活しない事があるだらうか。共產主義は一定の數に限られて居ない。共產主義は種々な方面を持ち得る。』

ワイトリングは是まで共產主義の實現を妨げた各種の原因を擧げた後、共產主義者間の小さい軋轢が其原因であると結んだ。

シャツバア、——今日迄、共產社會は存在しなかつた。夫婦共産生活すらも存在しなかつた。其原因は知識の不足、教化の缺如である。佛蘭西革命が初めて或程度の教化を提供した。一八三〇年の革命は進歩を促した。勞働者階級は今日迄教化から除外されてゐた。一八四二年以來、哲學者達は共產主義のため辯護の勞を採るに到つた。——共產主義の運命は決して個々の人物に支配されない。共產主義は意見の闘争に依てのみ堅固な根據を張る事が出来る。

ワイトリング、——基督教が屢々攻撃される。古代基督教には非常に長所がある。自分は基督教を攻撃してはならないと考へる。吾々は總てのものを利用すべきである。多數の人々の場合、理性で不可能の事も感情で可能なる場合がある。(此れはシャツバアの科學一點張りに當つたものである。)

シャツバア、ワイトリングを駁して謂ふ、——原理を感情の上に基礎づける事が出来るとするれば、その感情は全く人道的のものでなければならぬ。何となれば、かゝる感情に依て初めて、各種の信仰上の憎惡を根絶して、之を人間愛に變へる事が出来るからである。

パウエル、——吾人は何物も感情の上に基礎づけてはならぬ。精神に依て建設されたもののみが鞏固である。

クリイゲ、——感情が理性のために窒息する場合には、理性を棄てよ。人間が最高の欲望を充足した時初めて、人間は合法的に行動する事が出来るのだ。

ブフェンダア、——感情の働きは其性質上、一時的のものである。理性のみが着手されたものを試めす。其故に理性に基く國家のみが永續するであらう。

シャツバア、——感情も精神も共に國家を永遠に導くために必要である。吾々が同胞として相互を教化し、精神と感情に依て團結を喚起して初めて、人類を善道に導く事が出来る。

クリイゲ、——多くの感覺的感情を持てゐれば、その感情を自由に放任しなければならぬと私は主張するのではない。燃えてゐる火焰に身體の一部を觸れると、思はず身體を引寄せらる。飢ゆれば出来るだけ食をとる。それだけである。

クリイゲ、——吾人は無産階級を教化して初めて人類の運命は變るであらう。飢饉が宗教の聲と矛盾し初めた。唯此點に於いて人類に正しい概念を與える事が必要である。そうすれば人類は今後進歩するであらうし、收穫の秋も遠くはないであらう。

シャツバア、——飢饉に依て人類は目的に到達する事は出来ない。此事は世界史に徴しても明かである。吾々は革命を警戒する、何となれば革命に依て人類は再び隷屬の状態に立歸る。宣傳の法に依てのみ國民を今日の屈辱から救ひ出す事が出来るのだ。』

六月十六日役員の改選が行はれ、會長にクリイゲ、書記にパウエルが選出される。廿三日より再

び前問題を議題として討論が繼續される。六月廿三日乃至七月十五日までの議事録はパウエルの筆に成つたものであるが、極めて詳細で周到に記述されてゐる。

六月廿三日、シャツバア、—— 共產主義はこれまで實現出来なかつた。理性が充分發達しなかつたからである。迷信の鎖に妨げられて、現代人は古人と同じく共產主義を實現する事が出来ない。吾々の努力は子孫のためである。吾々が教化的宣傳の方法に依て、理論上普及し得たものを、吾々の子孫は實行する事になるだらう。

ワイトリング、—— シャツバア、パウエルの意見が一般に支持される事になれば、吾々の全努力は結局水の泡である。彼等の爲す所は、今日の事を明朝に、明朝の事を明後朝に、永遠に繰延ばすのである。何となれば、今日に就いて言へる事は又明朝に就いても言へるからである。斯様に同じ話を繰返してゐては到底罅が明かない。自分は思ふ、總ての人々は共產主義實現の時期に到達してゐる、犯罪者さへも。犯罪者は現今の社會組織から生れる、共產社會に於いては無くなると。人類は必然常に其時期に到達してゐる、若くは今後決して其時期に到達しないであらう。後の方は吾々の反對者の口吻である。彼等に言ふ通にすれば吾々は牡丹餅の落ちて来る迄拱手して待たなければならぬだらうか。決して左様ではない。吾々は共產主義實現の能力を持てゐる。だから其のために眞面目に努力する。單なる宣傳だけでは何の役にも立たぬ。

シャツバア、—— 人類が共產主義實現の時期に到達してゐるならば、人類は之を實現した筈である。ワイトリングは自由なる發展を遮斷して、人類をして其未だ認識しなかつたものを行ふべく

強制した。娼婦、窃盜、殺人者が共產社會に這入る事が出来れば、必ずや先づ大衆が之に拮抗して彼等を幽閉し、追放し、絞首する事となるに相違ない。昔には宗教の自由は存在しなかつた。其時代特定の信仰に従従しない者は、投石され、十字刑に遭ひ、焼き殺された。今日、宗教的自由が存在する。祖先の殉教者が宗教的自由のために血を流した様に、吾々は子孫のために戦はなければならぬ。併し吾々は決して何人をも強制してはならぬ。大なる民衆は先づ眞理を十分會得しなければならぬ。そうすれば他の物は自ら成就される。理性は先づ思考し、心は先づ自由でなければならぬ。共產社會のためにする誘惑的な口演で感動させても何の役にも立たぬ。この手で唆はれて行つた大衆は、必ずや其れだけ苦しい歸途を辿らねばならぬ。國民的、宗教的感情は應て再び混亂を招くであらう。先づ總ての人間が互に人間として抱擁しなければならぬ。それから共產主義が實現されるであらう。吾々は個人の自由のために戦ふ前衛である。恰も吾々の祖先が宗教的自由のために戦つた様に。吾々は假令、目的の實現を見る事が出来なくとも、善は善の酬があるかと考へて自ら慰めてゐる。偏見は不幸の種である。最高の幸福は地上の市民の高い意識である。軍勢の先頭に、先づ狙撃兵が進み、それから前驅が進んで、其の掩護の下に前進するが、共產主義に於いても同様である。吾々は戦の先陣を承る狙撃兵の役目で、吾々の背後に初めて前驅と社會的軍隊が来て、その後には頑固家や國民主義者の後部隊が続く。自分は尙一度言ふ、吾々の時代は尙未だ共產主義實現の時期に到達してゐない。暴力で人類に新思想を押し付けるのは、恰も無理に木の成長を促す様なものである。吾々は物理的力を排する。それは粗野なもので人類は其れを必要としない。人類は物理的

手段を用ひずとも自己の意志を貫徹し、戦ふ。吾々は人類といふ大樹の葉である。後世の人々は吾々が穏和な努力に依つて普及した思想の收穫を取入れるであらう。」

クリイゲはシャツバア、パウエルの所論に悉く猛烈に反対し、大體に於いてワイトリングの主張に加擔した。彼は、警察官や俗物共の口から聞いた事のある様な、彼等の話振を聞いて眞面目に悲しんだ。彼曰く、人類は未だ共産主義實現の時期に到達してゐないといふ此文句は、徹頭徹尾プロシヤ教育大臣の影響たつぶりである。共産主義の場合に於いては、人間が其精神的、肉體的糧の手段を獲得する事だけが問題であつて、空腹をかへたプロレタリアの物乞に對して、「然りお前は未だ食ふ資格が無い、共産主義は偉大な思想でお前が其實現を考へる前に、先づ全人類に依て認識されなければならぬ」といふ長たらしい口上を以て答へ様とするものではない。共産主義は、悲しい境涯に突然、教化の炬火に照らされて、今や自分を現在の様な傷しい境涯に陥れた社會に對して必死の反抗をしてゐる淫賣婦に對して、「お前は戦闘の時期に達してない、全人類が其勝敗を決定する迄先づ待たなければならぬ。」と呼び掛けるのではない。更にクリイゲは反動派の幽閉と追放のために、明かに表明せられてゐる敵對の全範圍を認めないのは卑怯であるといつた。彼は自己の信念が全く現社會と引離されてゐるを感じてゐる。彼は自ら革命家だと信じてゐる。彼は亦かうも信じてゐる、若しシャツバア、パウエルにして前の章句の結果を吟味したならば恐らく彼等の悲しむべき文句を固持しないであらうと。彼は亦現行社會秩序に對する革命は全く正當のものであるとも信じてゐる。更に彼の宗教改革論者に關する意見はこうである、彼等は闘争の場合、吾々の宗教的自由

を少しも眼中に置かず、唯々彼等自身の幸福のみを念頭に置いたと。彼はシャツバアが彼等の例に倣ひ吾々の子孫のためにではなく、吾々のために現代の利益を實現するため全力を盡す事を勸めた。フリッツ ユーゴ(四五年四月廿八日以来會員)——宗教改革者は自己のためでなく子孫のために戦つたのだ。農民戦争が此事實を證明してゐる。總ての革命は後世のために行はれるもので、決して自己の利益に關するものではない。人類は今日共産主義實現には尙餘りに劣悪である。發展は一段一段と行はれるものである。

ブフエンダア、——シャツバア、パウエルは全く自然に共産主義を展開させた。クリイゲの説明は恰も、太陽の光に地上に現はれたが、霜枯の頭を残して果實一つ結ばなかつた植物に似てゐる。クリイゲは自説を採用すべく人類を強制する。クリイゲは人類に向て言ふ、此を認識せよ、然らずんば余は汝の頭を打つべし、代て彼等が再び吾々を打つも強者は依然勝利者として止まらんと。彼は靈感を與へ様と欲する。靈感とは何か。總ての靈感は幻想である。長續きしないシャンパンの泡である、全歴史の證明する所は、唯總て早急の發展は速かに消滅するといふ事實である。全人類が其を充分會得しなければ、決して堅固な基礎を築く事は出来ない。

シャツバア、——クリイゲの演説は私に取つて一個の鏡である。十年前、八年前、尙六年前に(一八三九年)は私も丁度同じ事を言つてゐたものだ。多くの苦い經驗が私を冷静にした今日、私は「人類は尙未だ成熟してゐないといふ」反動派の口吻に賛成せざるを得ぬ。何となれば人類が既に成熟してゐれば、かゝる事は言へないからである。勿論ルツテルは自己の幸福のために戦つたに過ぎぬ。

併し乍ら、永遠の自然法の欲する所は之と全く相違する。吾々はルッテルの蒔いたものを穫り入れたのである。樹木を真直に曲げるには次第次第に行はなければ折れて仕終ふ。私は私の努力の報酬を私の義務履行の自己意識として要求するのではない。凡そ眞理は銃床尾(武力)を以て頭の中に叩き込まれるものではない。クリイゲの説く所は、傷しき良心及び社會の強制である。そして彼は怎うしやうといふのだらう。吾々は亞米利加に移住して、共產主義植民地の愉快な隠遁生活を送る可きであるか。然らず。吾々は子孫のために努力する。後世の人々は吾々の普及する眞理を愛撫して呉れるであらう。自然法は之を顧て呉れる。吾々は決して迷妄に囚はれてはならぬ。十億の全人類中、共產主義者は約四五百萬に過ぎない。彼等は全人類に比すれば殆んど何でも無い。私は依然主張する、共產主義革命は無意義である、それは共產主義の原理に全然矛盾すると。眞理は決して物理的力あるを要ひない。眞理は其自身に於いて充分強い。私は爰で眞理の福祉を心に注ぐ事が出来たならば、私の満足之に過ぐるものはない。政治的關係に於いては私も亦革命に左袒する。戦場で殞れる事は、年來私の本懐であつた。然し私は私の私情を抑へなければならぬ、私は人類のものである。私は彼等のために、眞理、平等、正義のために争はなければならぬ。クリイゲ君は果してよく罪人、盜賊、娼婦、殺人者と共に生活する事が出来るであらうか。彼等が若し最早私慾を満足できなくなれば、應て彼を見棄るであらう。一八三四年サゾワ一揆の時、革命的農民はパンを得られなくなつた時、遂に惡魔に趨つた。革命をやめよ。吾々は倦まず、恐れず人類の假面を剥がなければならぬ。それが吾々の當に爲すべき總てである。』

ワイトリング、——爰で眞理、自由、正義の問題が大分話頭に上つた。吾々は總ての努力を是等のために献ぐべきである。吾々が未だ殆んど明瞭な概念をすら持たない様な概念のために生きねばならぬとは傷しい事である。吾等の概念を精密に決定せよと請はれるならば少くとも非常に當惑するであらう。シャツパアの演説は大變長く、非常に面白かつた。併し彼の全講演の論旨は結局こうである、彼は先づ革命に反対し、次いで賛成し、再び反対したのである。未熟といふ言葉は凡ゆる進歩の反對者の常套の武器である。爰では總を多數決に依て決定しやうといふのであらうが、其れは全く誤である。人類の統一が何處から来るべきかに關して、吾々は一度も意見の一致を見なかつた。若し人あり、萬人の委囑をうけて全人類の教師を任命するとしても、意見の相違のため昔の様な争が新に始まるであらう、そして今日、教化の場合も全く其通りである。その先は怎う成るか。總ての安寧が教化に存するならば、如何にして之に到達し得るか、教化の手段は何處に存するか。檢閲、其他の妨害を除いても百萬二百萬の人々は我々の主張を聞く暇がない。斯様に毎時代斯様に濟んで行けば、青年達に又新に教化を繰り返さなければならず、何時までも教化は一般的とはならない。教化は唯一部だけに限られる事になる。クリイゲ君と私とは吾々の希望に關して決して特別の意見を提供したのではない、吾々は唯々、現代未熟説に抗議を入れただけである。そして共產主義が行はれてゐないといふ事は決して現代未熟説の證據とはなり得ない。今日行はれない事も明朝行はれるのである。革命は嵐の様に起る。其結果を何人も豫測する事は出来ない。最後に若しシャツパアの如き信念を持つてゐる場合でも、之を公言するのは非常に非政策的である。かゝる信念は

青年の勇氣を挫く。吾人は決して青年の胸底の熱情を、かゝる勇氣を阻喪させる如き原理に依て冷却してはならぬ。希望が最早吾々に無いならば熱情は何處から生れるであらうか。

(六月二十日 クライゲはシャツバア、プエフンダア側からの多數の攻撃に答へ、更に未熟説に基く強制的平和理論を反駁して曰く、歴史は未熟説の正しい事を少しも證明する事が出来ないし、又若し出来ても歴史は少しも革命に不利の事を證明してはゐない。佛蘭西革命は其目的即ち全國民の第三階級即ちブルジョワ及び神即ち貨幣に對する隷屬を完全に達成したと)

彼は亦サゾワ一揆に就いて反駁して謂ふ、奪ふべき食物が最早無くなつた時人々が此一揆から離反したのは全く正しい。何となれば此事實は、此一揆と彼等の利益とが全く關係が無いといふ事を彼等の胃腹に示したからである。革命の目的が同時に此運動に参加せる大衆の私的利益でなければ、必ずや其革命は畢竟水泡に歸せざるを得ない。共產主義はプロレタリアの最高の私的利益である。何となれば、共產主義は食糧、住居、衣服の手段を萬人に提供する外、他意ないからである。其故に共產主義はプロレタリアの心の中で始めて必然的に革命となり、又ならなければならぬ。今日迄尙、共產主義革命は無かつた。其故に従來の革命からして吾々が何等既成の果實を得なかつたのは寧ろ自然の數である。

シャツバア、——先づ、私はワイトリング君に反駁しなければならぬ。私が個人として革命家であるが社會の一員としては然うで無いといつたのは決して矛盾ではない。クライゲ君は歴史は少しも吾々の主張を證明しないと主張したが私は之に反し、歴史は吾々の主張を悉く證明してゐる、反動派は吾々より知識に於いて卓れてゐるので、吾々の強敵であると思ふ。共產主義革命は既に數千年以來存する、到る處、有産者と無産者は對立してゐた。ソロン、リクルグス時代の雅典、農民戦争時代の佛國、ワット・タイラア時代の英國然り。獨逸の農民戦争は白耳義の運動と同じく社會革命に外ならぬ。併し乍ら是等の革命は恰も佛蘭西革命がナポレオン、チャアルス十世、ルイ・フィリップ時代に死滅した様に、何れも皆没落した。須臾の勝利の後にはそれだけ墮落も大きい。それが總ての革命の運命である。だから吾々は吾々の原則に極めて危険なる諸原理を標榜する事を慎むべきである。それからクライゲ君は共產主義を物質に還元しやうとする、即ち共產主義者の目的は飲食であるといふ革命家の口吻を實現しやうとして却て總てを共有の泥土に引き込む。否、國民は先づ人間でなければならぬ、殊に精神的に恵れてゐなければならぬ。吾々は人間の自由、平等、正義の名で戦ふ。併し是等のものは斯く速かに來るものではない。吾々は先づ國民を教化しなければならぬ。然らずば外面的破滅に躓いて自己破滅が來る。總てが無政府と専政主義に歸著した事は、歴史の吾々に物語る所である。民衆が尊敬すべき人々を殺せば殘るものは唯卑劣なるもののみ。否、吾々は決して一度でAからZまで飛躍してはならない。今日の政治には、到る處、卑劣な買収や、理性に反對する結果が出來てゐるが、今日初から財貨共有社會が怎うにも成るものではない。その實現は後世の人々に屬する吾々は唯教化する事が出來る、常に教化することだけである。クライゲ君は怎うして私的利益を共產主義革命の原理とする事が出來るであらうか。吾々は宜しく私的利益を根絶すべきである。吾々は犠牲を説く。私が假りに私的利益を追求する位なら、寧ろ最も謙遜な願書を差出して、

王者の如き待遇を受けるのだ。これは危険な思想である。總ての人々の利益を計る事に私の満足は存する。亦私が共産主義の宣傳をしてゐるのはわが同胞の事を一番心配してゐるからである。若し共産主義は私利を追求するものであると私に告げる人を私は信頼しない。共産主義は犠牲を要求する、そして私は犠牲を共産主義のために拂ふものである。

モオル、——私にしてワイトリイグ、クリイグの言ふ所を正しく理解してゐるとすれば、彼等は革命を齎らさうとするのではなく、既に行はれてゐる革命を唯支持するだけである。併しその場合でも亦私は、革命の目的が國民の利益であるか否かを明確に観察しなければならぬ。今日迄總ての革命は唯少數者の利益を計るに過ぎなかつた。佛蘭西革命さへも決してブルジョワジイの利益を計るものではなかつた。此事は多數の破産の事實に徴しても明かである。其故に私は革命の結果が國民の利益と調和する事を充分精確に見定めな限りは、到る處で革命反對を説くのが吾々の最も神聖なる義務であると考へる。

ワイトリイグ、——私は爰で別に革命を奨励するものでも無ければ又之に反對もしない。私は其影響を批評する、唯批評する許りである。各國民は其誇りとする總ての自由を、唯革命に依て獲得したのである。從來、教化は政治的方面に於いては、革命に依らなければ何の得る處がなかつた。革命後初めて教化は効果がある。總ての國民は殆んど例外なく其自由を革命に負てゐる。平和的方法による教化は一つの錯覺である。努力の目的は鬭争に於いてのみ貫徹される。此處で吾々が教化に依て團結出來ないとすれば、果して何處に行けば教化に依て團結を齎す事が出來やうか、而も吾

々はお互労働者中の智識分子に屬してゐるのだ。併し乍ら革命、それは言論、出版の自由の存する限り、立派な團結及び教化手段である。革命の場合、心は同胞、惱める同胞に對する同情、嘗て思ひも及ばなかつた同情の力に捉へられる。此場合には、盜賊も竊盜を忘れ、娼婦も賣春を忘れ、裁縫師も優美なる外衣の事を忘れる。總てが此場合には、同胞となり、總てが一つの心、一つの靈となる。理性の役目は貧しいものとなる。理性は感情無くしては無意味である。この場合、總ての感情及大事業は皆、民衆を動かす感情の力に依て行はれてゐる。世人は物質に戦を挑む、併し物質的基礎なくしてはや總ての理性は無意義である。飢ゆる者に教化の説法は無意味である。窮迫せる者には彼等の欲望の満足が何よりでなければならぬ。だから吾々は先づプロレタリアから財産尊崇の念を驅逐し、彼を金錢に對して革命的にし、彼が若し窮迫の餘り物乞したり、餓死するよりも、寧ろ竊盜を働いたとしても、決して罪人ではなく寧ろ却て勇敢なる男であるといふ事を彼の心に刻みつけてやらなければならない。

(七月六日) バウエル、——本問題に答ふる事は容易でない。吾々の考へる様に、個々の共産社會の建設は決して共産主義の實現と見る事が出來ない、共産主義は全人類を抱擁すべきである、共産主義を斯様な意味に考へれば、吾々は安んじて次の如く主張出来る、即ち一方に於いて、人類は今日尙未だ共産主義實現の時期に到達してゐない、他方に於いて將來に於いても到達しないであらう、何となれば縦令、いつか共産主義が全地上を征服しても、其歴史には必ずや今日各國民の政治史に見ると同じ様に、興亡浮沈の姿が現はれるに相違ないからである。一國民に興亡ある様に、共

産主義も興亡盛衰を免がれない。原始人は自然的共産主義者といふ事が出来る。何となれば彼等は汝の物と私の物との區別を辨へず、尙私有財産に關する何等の概念を持つてゐなかつた。今日、共産主義導入の障礙となつてゐるものは主として此私有財産である。今日存在する様な小規模の財貨共産社會は、之を抑壓してゐる舊來の社會に比すれば極めて些々たるもので、又直接、私有財産に反抗して起つたものではなかつた。單なる平和的教化に依て共産主義を實現しやうとすれば、有産者の利益といふ越へ難い障礙に逢着する。有産者は極力、自己防衛に力めるだらう。勿論場合によつては有産者や有産者を支持する政府が主として共産主義の導入に却て貢献する場合がある。彼等が卑劣な手段に依て却て詭向きの宣傳者となる場合がある事は今日の政治が何よりの證據である。斯る卑劣の壓迫は必ず有力な反撥を招く。かゝる壓迫は結局、舊社會が暴力で瓦解されるまで續く。單なる平和的教化の方法を頼みにしてゐるだけでは前途は心細い。大なる物理的事件が彼等を強制するでなければ、有産者は決して私有財産を放棄しないであらう。鬭争無くば何事も出来ない、教化は徒に新しい革命を準備はするが決して之を避ける事は出来ない。ウイットリングは既に吾々に説明してゐる。吾々は今日大なる準備時代に居る。國法、政府の政策、産業の進歩は社會問題を前に押出し、其結果、全國民が自ら共産主義を作り出し、是を發達させ、其の爲めに、奇妙な法律や排共産主義國家が自ら易々として全人類に自己の新生活原理を鼓吹する事が出来なくなつた。斯様にして初めて全地上が共産社會のために征服さるゝ時代が来るであらう。今日、征服國民、産業國民が存在するが又他方、社會問題に留意せる一個の人道主義的國民がある、そして其國民は獨逸

である。共産主義を今後愈々普及するために献身の努力を惜まなければ、共産主義の實現は曩の討議で多數の人々が主張した様に遠い將來の事ではないであらう。』

シャツバア、——此問題を議論するに當て直ち重要な二個の問題が発生する。一、現代は共産主義實現の時期に到達してゐるか否うか。二、共産主義實現の鬭争に於いて吾々は必ず革命的でなければならぬか否うか。今歐羅巴の統計を見るに讀書の出来るものは其半數に充たない。斯様にして現代に對する私の期待も非常に失はれた。併し宣傳は之を秩序的に行へば恐る可き力を持つてゐる。例へば獨逸に三千人の共産主義者が居ると假定して、各自夫々年々三人を教化するとすれば、六年で三百萬人、殆んど全獨逸國民を得る事になる。かくすれば次の時代には最早共産主義實現の時期が来る。少くとも社會組織改善の時期が来るであらう。何となれば予は今日一度もAからZへの飛躍を信ずる事が出来ないからである。口頭教化に次いで出版物、最後に物理的力を用ふれば、實現の時期は豫想通りに来る事になる。吾々は最近五ヶ年の間に五―七千人の共産主義者を得た。後五年の收穫を待たうではないか。現代に期待する所少ないからこそ自分は將來に希望を繋ぐ事多いのである。即ちそうなれば思想家達が献身的に吾々を援助して呉れる。例へば彼等が累進税制を實行したのは吾々の援助であつた。吾々は純粹の共産主義俱樂部を建設して運動を促進させる事が出来る。第二の問題に關しては、舊來の混亂に一縷の目的を與ふる様なカクストフが一度起れば、吾々は必ずや革命を警戒しても到底自制出来なくなる事は確かに豫想できる。熟考へるに斯の如き暴動を恒に誘發せんと力むるものは正しく政府其自身である。政府が若し一個の運動が最早抑へ切れ

ないで、既に全國民を捉へた事を見ると醫者の眞似をして病人の潰瘍を切開するか、速かに出血させるか、彼等の遺口である。彼等は反對者の最も猛烈なる陣地に密偵を送り、突然の暴動を起させ、首魁に對する見受けどころ尤もらしい彈壓で全運動を鎮定する。一八三二年巴里暴動の如きそうであつた。リヨンでは政府の密偵が政府の兵士に銃殺された。一八三九年五月私は巴里で一人の愛國者が革命の熱心なる指導者を銃殺して彼の懷中から黄色の名刺を取出したのを目撃した。この意味に於いて教父カベエの態度は政府の頭痛の種であつた。彼は到る處革命反對の説教をした。それで政府は全く外面的理由を持たず、例へばツウルウツの訴訟の如きは全く政府の敗北であつた。シレジャに於ける最近の陰謀史の明かに示す様に佛蘭西警察の眞似をやり始めた獨逸でも吾々の態度は之と同一でなければならぬ。到る處で青年を抑制するのが吾々の最も神聖なる義務である。吾々は吾々の冷靜なる態度に依て、却て政府を革命的にしなければならぬ。政府は必ずや益々吾々を攻撃するに相違ない。そうすれば、結局、有利なる勝利の戦争が出来る時期が来る。七月革命はそうであつた。ブルジョワジイは決して革命的ではなかつた。彼等は法律に特許された權利を擁護しただけで勝利した。獨逸に於いても吾々は合法的方法に依て前進し度いものである。吾々に幸な事には獨逸のブルジョワジイは尙抑壓されてゐる。彼等は政府と第一戦を交へるかも知らぬ。其時はプロレタリアを後に扣へさせて、一八三〇年の佛蘭西人の様に利益を得る様にし度い。吾々が冷靜で、到る處青年達を制止して一圖に吾々今日の努力を悉く教育に限れば、ブルジョワジイはいつか必ず吾々が一八三〇年の場合よりも準備萬端整ふてゐるのを見るであらう。そして吾々は政府に對するブルジョワジイの勝利から相當甘い汁を吸ふ事が出来るといふものだ。』

ワイトリング、——黨派が尙小さい間は、凡ゆる手段を用ひて之を強固にしなければならぬ。教化が必要であると均しく革命家も必要である。吾黨の手加減を彼是と批評するのは政策上思はしくない。斯様な事は全く無用である。かゝる事は總て黙つて看逃せる事だ。吾々の原理が應て實現できるといふ事實を勞働者に示さなければ彼等に宣傳を行ふ事は絶對に困難である。實現の可能性は革命以外に存在しない。そして純粹の革命家こそ吾々には又立派な男である。熱情を以て事に當る人こそ必要である。應て來る暴動に希望を置けばこそ、心も一入動くが平和の説教では到底この事はあり得ない。教父カベエは畢竟老人である、彼の雜誌「平民」の讀者の半分も彼の平和的傾向に賛成してゐない。永遠の平和的宣傳は勇氣と熱情とを鈍らし、其の上一般に極めて緩慢である。縱令革命の結果が唯々反動派の迫害に終る場合でも、時折革命的戦闘を起さなければならぬ。其れだけでも正しく最良の宣傳である。殉教者の荆冠は詩人や講演家の桂冠よりも人心を收攬する。此事實を政府はよく知つてゐる、だから彼等は殉教を黒死病の如く恐れる。例へば新教が加徒力教の迫害を受けてゐた時、新教は如何に生氣に溢れてゐた事であるか。今日其熱情は冷めてしまつた。昔日はゴルツテル主義の信者の蝟集した事はない、昔日はゴルツテル主義を尊敬した事はない。一般に基督敎についても同様である。私は今一度繰返す、永遠の説教は緩慢で、恐らく長續きしない。政府は吾々の宣傳の標語を彼の利益のために使用するであらう。恰も一八三三年プロシヤ王が佛蘭西革命の標語を利用した様に。吾々は吾々の經驗を餘り恃んだり青年の無分別を非難するのを慎む。無分別の青年

は淺薄な知識を持った老人よりも却て合理的な仕事をする。青年の感情は、理性によつて之を凡ゆる經驗や書物から拾ひ集めた場合よりも、遙かに明るく眞實に燃ゆる。既に青年の大膽なる行爲が疑ひ深い老人の崇敬措かざる言葉を嘲笑した。』

(問題、六) 而らば如何なる方法に依れば共產主義の導入は最も容易であるか、(四五年七月十五日廿二日)

シャツバア、——一般に共產主義は獨逸に於いては人道主義的、佛蘭西では政治的、革命的、英國、殊に亞米利加では全く非革命的、實際的、建設的、即ち亞米利加に於ける各種傾向の五〇—六〇の植民地の如き之である。』

彼は又ヱルトの累進税體系及國民工場論に就いて謂ふ『かゝる方法に依れば、國家はブルジョワジイの競争を抑壓するであらう。同じ方法で私有財産は國民の財産となり、かくして必ずや共產主義は實現される事となるであらう。』

ワイトリング、——共產主義導入の最も有効なる方法如何の問題を論ずるためには、先づ從來應用された總ての手段を精密に批評してかからなければならぬ。オオエン主義者が「調和會堂」を建設した時、彼等は物質的繁榮を看板にして周圍の人々を入會させ、説得の方法に依て次第次第に英國を共產主義のために征服する考であつた。彼等の希望は失敗に歸した。何故だらう。舊社會から來た一定數の人間が一度小さい範圍に限られると、間もなく舊社會の美點だけ目に付いて缺點が目につかなくなる。彼等は無用な獨よがりの反對をして自ら調和を破壞する。自分や會員全體の物質的利

益を傷けないで容易に其場處や社會を變へたり、反對者を除く事が出來たならば或は調和は保證されたであらう。しかし今日の社會なら知らず斯様な小さい植民地では左様に參らない。彼等は利害を異にする小い人間の團體に結び付けられてゐる。恰も女が男に、男が女に結び付けられてゐる様に。自由は制限されてゐる。愛情と我儘とを避ける事が出來ない。殊に「調和會堂」の場合には其出資が全く不足した。組合だけでも實際活動に着手するに先て九百磅の家賃を支拂はなければならなかつた。それから競争に堪えるために舊社會の總ての價格を其儘維持しなければならなかつた。斯様にして主なる利益は失はれた。更に悪い事は、場所や社交範圍、勞働團體を變化する事が出來ないといふ最初の不利益があつた。

加之亞米利加の移住者は凡ゆる精神的糧を缺いてゐた。此れは彼等が此地に慣れるに伴つて益々彼等を酷く苦しめた。今日の社會と全く離れて彼等は當然退屈に苦しんだ。彼等は舊社會に對する一種の郷愁と戰つた。かくて互に生活を墮落させた。併し、歐洲では既に全く完成したものを亞米利加で今後作るために、ブルジョワジイの美しい作物を棄てる事は又愚な事である。亞米利加では人々は、永い間自由を奪はれ、森林を斬り拓かねばならなかつた。斯んな事をしないで歐羅巴にゐて何か有用な仕事が出来たものを。少くとも社會のために働けたものを。

當面の問題に立ち歸て私はこう答へなければならぬ、共產主義のためには手段を選ばず。吾々は無用の反目で仲間割れをしないで、吾々のために有利なる總てのものを支持しなければならぬ。若し吾々の賛成出來ない思想を持つ人があれば、吾々は彼に反對しないで寧ろ全く沈黙する。吾々

は一定の傾向を代表する一大政黨である、吾々は黨の個々の遺口に反對したりして時間を徒費してはならぬ。根本的傾向さへ同一ならば、宣傳を行ふに無神論を以てすると、宗教を以てすると、植民を以てすると革命を以てするとは、吾々に取つて怎うでも好い。私は私自身の見解を持つてゐる。併し共産主義に有益なる他の見解にして之と同様の寛恕を任務とするものならば敢て之を支持するを辭せぬ。』

シヤツバアは植民地の種々なる缺點に關し、更に佛蘭西的傾向に關して論じて謂ふ、『佛蘭西人は萬事を政治革命に依て實現せんと欲する。教父カベエ謂へらく、政治革命が先づ起て、此革命に依て、強い意志と、聰明なる理性と仁慈とを以て、共産主義を完全に實現し得る一個の獨裁者を出すべきである。左すれば五十年の過渡期を経て全國民は共産主義國家に變るであらうと。』

ワイトリングは目的のために手段を選ばずといふ、私も同感である。彼の窃盜論は既にブルドンが充分論證した様に、今日の社會狀態の嚴密なる結論ではあるが實際的意義に到つては、錯覺に基く様に考へられる。窃盜が一般的になれば著しい混亂が生れる。私の恐れるものは唯、その結果として共産主義が生れず、卑む可き革命的專制政治が生れはしなかつたといふ事である。そうならば幾千の人々殺され、それと共に昔の義賊道は却て醜い負擔と變る。嘗て倫敦で、執拗なパン及び肉の掠奪が行はれた事があつた。餓えた泥棒は空しく獄舎に押込まれた。政府の遺口は中々狡く二三名だけを捕縛して之を流刑に處して將來を戒めた。私は總の手段に賛成だが、之だけには賛成出来ない。私には實際的關係に於て此方法は全く無稽のものであると思はれるからである。』

四五年七月廿二日以後の議事録はゲベル Gabel の書いたもので非常に簡單である。

(問題、七) 共産主義の導入に最も多くの利害を持つものは如何なる人か、其の中何人か共産主義實現促進の手段を最も多く持合せてゐるか。(七月廿九日—八月十九日)

ワイトリング、——恐らく多數の人達は、獨逸で發行されてゐる共産主義新聞を讀んで、その中に説かれてゐる愛から、自由に引込まれたと思つてゐる。共産主義は野望家、征服者にも或物を保證する。だから征服者も王侯も共産主義に傾くであらう。王侯が病氣をして、其のため病人や青年者の状態を知るに到れば、彼は貧者と病者に對する愛から、共産主義者となるであらう。健康を充分享得してゐる富者は決して共産主義の必要を感じない。朝氣旺盛な青年は共産主義に傾く。何となれば若し何か共産主義のために貢献し度いと考へれば、其朝氣を共産主義に依て満足させる事が出来るからである。共産主義文書は婦人にも適し、貧者にも利益がある。革命家も亦其れに依て満足を見出す。』

レエマンは大王室から馴けられた反感から共産主義に興味を持つた王侯の事を述べた。
バウエル、——否、勞働者こそ共産主義に興味を持つであらう。彼等を教化すれば、彼等の要求は電光石火の様に速かに成就さるるであらう。

フリッツ、——皇帝ヨセフは彼が國民に好意を持つてゐた事を示してゐる。何となれば、吾々が或身分に昇らうとすれば、閥派に就くことになる。富者にも尊敬すべき人々がある。吾々が善行を示して彼等を吾々の仲間に引き入れれば、彼等は彼等の有する手段によつて吾々を援助して呉れるだらう。プフェンダアはバウエルに同意して謂ふ、『中産階級が共産主義に對しては多くの利害を有する。』

吾々は教化に依て貧乏人、無産者を引入れなければならぬ。學者は既に吾々より先に進んでゐる。彼等は教壇から下りて来て、國民を教へ、國民の當になす可き事を知らしめた。

ワイトリング、——吾々が如何なる人を吾々の仲間に取り入れ様ぞ區別立は出来ない。貧者及び不幸者のために全財産を遺した皇帝ヨセフに若し老フリッツの勇氣があつたならば、國民のためにもつと盡す事が出来たであらう。併し彼の爲した事を自ら苦しんで贖はなければならなかつた。吾々は重に労働者を頼らなければならぬ。吾々は又金で活動しなければならぬ。目的のために手段を撰ぶを要ひない。革命的手段に依て共産主義を齎らすためには、萬事を支配する獨裁者を起さなければならぬ。其故に獨裁者は他の總ての人々よりも、多くを所有してはならぬ。獨裁者が一意、一般的幸福のために働けば、吾人は彼に對して、こゝろ好く此地位を與ふる事が出来る。』

八月六日、バウエルは王侯共産主義を反駁して謂ふ、
『吾々は、尙何物かを持てゐる階級だけに限らねばならぬ。最下層の國民階級は何事にも無頓着である。尙ほ最下層に沈倫してゐない階級に吾々の望を囑さねばならぬ。從來、何時の時代にも、最初に武器を採つたのは此階級であつた。彼等は再び戦争が來ても何のために戦つてゐるかを知る事が出来やう。』

フリッツ、——宣傳を労働者だけに制限するには反對だ。吾々は富者をも亦引入れなければならぬ。

レエマン、——一例を學者にとらう、そして吾々の目を工場街に向けやう。

バウエル、——教育はよりよき將來を招致する重要な手段である。十年前は尙今日程ではなかつた。學者、哲學者が吾々と携へて働く。富者は吾々と一になるのを求めて來るであらう。吾々は大闘争なくして共産主義を實現する事が出来ればよいが。

ワイトリング、——私は前の討議で既に總ての階級の事を述べた。富者も學者も共産主義に賛成するであらう。しかし富者が縦令、共産主義に好意を持つても彼は之に全く満足して居るのではない。無産者は共産主義に多くの利害を持つてゐる。併し人類の十分の九は未だ全く共産主義の何たるかを知らない。農民には特に知られてゐない。ハンス・キイキンデウエルト Hans Kielindewelt の書物は共産主義的著作である。既に數年前書かれたものであるが世人は全く之を知らない。

(問題、十、總ての思想系統と全く無關係な、最も完全なる共産主義の眞髓は如何(四五年九月卅日乃至十月十四日)

ワイトリング、——共産主義とは、自分のためになす事は又他人にも善であるか、若くは出来なければならぬ、そして何人にも障礙を及ぼしてはならぬといふ事である。要するに、人の望む所のものは又誰にも望まじきものでなければならぬといふ事である。

無神論は偏狭な原理である。何れの宗教信徒に就て言つても同様である。人に信仰を強ゆべきでなければ、放任するのが最善の方法である。何れの時代にも好んで宗派と道德を人に説く人々がある。併し乍ら常に試金石となるものは、果して其の言ふ所が又萬人に善であるか、怎うでかなければならぬ。』

ワイトリングは無神論と持論の婦人共有を論じて更に自己の立場を繰返して云ふ、『人の欲する所は又他人に取つても善でなければならぬ』と。

シャツバアはオオエン、カベエ、ワイトリングの體系を批評した後、謂ふ

『人間の本質を顧るに、人間は勞働に於いてのみ幸福を見出す。勞働と享樂とが交替して、各人の幸福が完全となるであらう。決して強制を用ひてはならない。何となれば人間は決して劣等ではないから。人間が正しい教育の階段を踏めば、喜んで勞働をするであらう。人間が宗教を奉ずれば總てを忍耐し、自家の權利に齟齬しなくなる。私の言ふ意味は、各自は、この世に神がないと信ずべきであるが併し神は道德律と調和すべきであるといふ事ではない。吾々は又神を吾々の問題に混入するの要はない。一般に國家問題の中に超俗的のものを混同してはならない。要は各人に對して共產主義の真髓は各人の自由な發展でなければならぬ事を教へるに在る。』

十月十四日、ワイトリング、—— 共產主義の真髓は總てのものが共有される状態である。決して自由なる發展に存するものではない。共有といふ事が根本要件である。總ての關係は一個の鎖の様に繋つてゐる、特殊の利益といふ様なものは存在してならない。吾々がかかる状態を求めるのは自然に依て閑却せられてゐる人々の利益を思ふがためである。吾々は基督教を充分利用した。吾々の義務は又共產主義を充分利用しそこねない様注意する事である』

パウエル、—— 自由は共有を伴はないといふのがワイトリングの意見であるが、人間が自由を得れば、又共有を満足させるに相違ない。人間は自由を共有しなければならぬ。然らずば自己の能力を發展さす事は出来ない。』

シャツバア、—— 私の述べた原則に尙、「共有」といふ事を附加しなければならぬといふのがワイトリングの意見である。發展の基礎は萬人に共有でなければならぬが、享樂の共有は恐らく行はれまい。何となればそれは丁度兵舎の軍隊の場合と同じであるから。是がため重大な闘争が起らぬとも限らぬ。私は更に萬人の幸福は自由なる發展に在ると考へる。』

ブフェンダア、—— 自由なる發展は共有を伴はざれば不可能である。吾々が總ての點に於いて修養を積み重ねただけでも既に共有である。後の時代には尙は多くの變化が起るであらう。何となれば各人は共有的調和に依つて彼の好むものを得る事が出来るから。其の上非常に節約を重んずるに至るから。』

ワイトリング、—— 議論は問題に少しも觸れてゐない。自由なる發展は今日の社會の支配者達でも吾々に興え得る。是は決して共產主義の真髓ではない』

シャツバア、—— 之を獨逸の自由主義者に謀れば彼等は承認しないと思ふ。各人は個人的自由に背かないで自己の充分なる自由を持たねばならぬ。』

(問題、十一) 共產主義の真髓から見た近代及古代の各種體系の吟味、(四五年十月廿一日乃至十一月十一日)

ワイトリングはオオエン、カベエ、フリエエの體系を論じてカベエを多とした。

シャツバア、—— 嘗て體系の時代があつた。今日私に取つては最早體系といふものは存在しない。

この體系も兵營生活の様なものであつた。少しも人間の内部に觸れてゐなかつた。オオエン謂へらく、勞働は苦痛である。困難な勞働は青年に屬する。老人は治世の才に最も長じてゐると。然るに廿五―卅五才は男の働き盛りである。フリエエの系統は多くの點に於いて、寧ろ嫌惡すべく、笑ふ可きものである。總て是等の人々(オオエン、フリエエ)は唯如何なる方法で最も困難なる勞働を行ふ事が出来るかだけを求めてゐる。各人は夫々特殊の性癖を持てゐる。何か強制を受ければ決して愉快ではない。人間の本性に還れば、總てが秩序あり、二世の後には萬事が最良の調和を得るであらう。カベエの體系は餘り平和的である、平安に失すれば、人類は又奴隸となる。常に鬭争をしなければならぬ、併し此鬭争は精神的方面に於いて行はねばならぬ。今日既に共產主義者を非難して、共產社會には最早よりよき或物に對する衝動が無くなるといつてゐる。併しよりよきものを求め様と努力せざる人々は禍なるかな。オオエンの家長的體系、長老の支配には反對である。』

ワイトリング、——勞働享樂の共有は可能である。最も有能者のなし得る所は弱者にも與へなければならぬ。各種の體系を吟味すればカベエの體系が最善である。

シャツバア、——オオエンもカベエも人間の本性に還らなかつた。是等は唯未熟の體系であつた。是等も時代と共に變化し、又よくなるであらう。』

ワイトリングは四六年一月七日迄講演者としては是等議論に参加しなかつた。

(問題、十三) 是等の利益(自由、獨立の齎らす)は有名なる體系の中に如何なる程度まで保證せられてゐるか。(四五年十一月廿五日)

シャツバア、——ワイトリングの體系には自由に對する何等の保證すら存しない。眞正の體系は現代の新しい獨逸哲學者の手で作られると私は考へる。ワイトリングの體系を検討した以上、最近の獨逸哲學を吟味した方が有益であらう。それから吾々の思想に近づく事にしやう。

(問題、十五) 人間の力を測定する最も正確なる尺度は何か。最良の交易制度は何か(四五年十二月二日)

シャツバア、——ワイトリングの體系中に述べられてゐる様な交易制度は共產社會には存在し得ない。吾々はワイトリングの體系を既に放棄してしまつたから、之に關しても此れ以上更に問題としないでもいい。取引時間は却て禍の種とならう、何となれば之に依て或者は他者より一層欲望の満足を受ける事が出来るから。取引時間を要求しないで、人間は恒に必要だけの物を生産するであらう。』

(問題、十八) 君主制、立憲制、共和制は夫々其性質上、國民に對して如何なる利益、不利益を齎らす事になるか。(四六年一月七日)

此問題の討議には四五年十一月十八日以來暫く姿を見せなかつたワイトリングが出席して滯英中最後の意見を述べる。

ワイトリング、——君主制に於いては一個人の言に依て行動するから統一の利益がある。共和制に比して餘程効果が擧がる。共和制では選舉に依て行動するのであるから、君主制に於ける様な統一を齎らす事は出来ない。各自が銘々意見を吐くので、精々不秩序位が關の山である。一般に戰爭に

際しても共和制はよくない、と言ふのは選舉で裏切られる事が多いから。しかし共和制は其自由あるがため又幾多の利益を持つてゐる。吾人は一般に宜しく國事をナポレオンの如き人物に委任すべきである。

佛蘭西共和國は幾多の利益を齎らした。之に依て又自由を齎らす事が出来た。しかし一致が缺けてゐたために全部が瓦解した。ナポレオンは一致に依て政府を救済した。ナポレオンは新憲法を編纂して之と統一とを結び付けた。ナポレオンを支持したものは彼の名譽心だけであつた。若し原則にして確定せば、一共和國と雖も又共產主義を實現する事が出来る』と。

以上述べし所は四五年二月より四六年一月迄ワイトリングが英國を出立する迄の間、倫敦共產主義労働者教育俱樂部で行はれた同盟綱領の主要問題に關する討議の概要であるが、吾々は此中に同盟の思想的變化の跡を明かに認むる事が出来る。感情、宗教を主とするワイトリング、クワイゲと、其實現の時期、其方法、其他の問題に關する根本的見解の相違となつて隨所に現はれてゐるのを見る。殊にワイトリング不在中行はれた第十三、第十五問題の討議は、ワイトリングの共產主義に加へられた積極的批評であつて何等兩派に妥協提携の餘地なく、既に兩者の間に到底隙ゆべからざる思想的溝渠の出來た事を如實に物語てゐる。綱領の討議は四六年十二月を通じて繼續されたが、如何なる意あるや、ワイトリングは前記一月七日第十八問の討議を終えるや、孤り漂然として英國を後に白耳義の主都ブリュッセルへの旅に上つた。恐らく同盟内部に於ける思想的敗北の痛傷は彼をしてこの上、永く英國に止るに堪えざらしめたものか。

巴里以來久しく同盟の中心思想となつてゐたワイトリングの思想も彼の退英と共に事實上同盟から驅逐せられ、同盟の實権は思想的にも、政治的にも、全くシャツバア、プフェンダア、バウエル、モオル等の手に移つた。これ全く同盟自身の自律的覺醒に基くものであつて多數史家の言ふが如くマルクス、エンゲルスの思想的變化に歸する事は出来ない。

エンゲルスは前記同盟の思想的變化の原因を専らマルクスの唯物史觀の發生に求めて居る。(1) Grünberg, Mehring 何れもエンゲルスの言を其儘踏襲してゐる、併し筆者の考ふる所によれば、是等は均しくマルクスの功績を録せんための誇張に外ならない。明かにマルクスの影響を自すべきものは寧ろ四六年三月マルクス對ワイトリングの確執、同年五月クワイゲ事件頃からの事と思はれる。併し同盟のワイトリング思想との絶縁は必ずしも總ての空想主義との分袂でも無ければ又直ちにマルクスシズムへの道でもない。嚮導思想を失つた同盟は今後暫らく思想的摸索の道程を辿らなければならぬ。

(1) Max Nettlau, Londoner deutsche kommunistische Diskussionen (Grünberg's Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung 10. Jahrg. 1922. S. 365-386)

(2) 四月十四日の討議には、當時滯英中の歴史派の驍將アルノ・オ・ヒルデアランドが、シャツバアの紹介で議事を傍聴して、翌日付友人宛の書簡の中で當日會議の光景を面白く描いてゐる(拙稿、「アルノ・オ・ヒルデアランドの一書簡」三田學會雜誌第二十一卷第六號参照)

(3) Engels, a. a. O., S. 36. 38.

(4) Grünberg, a. a. O., s. II. Mehring, I. Bd. S. 351 a. a. O.,

五 マルクス及びエンゲルスの出現

—正義者同盟と加盟前の兩者との交渉。

マルクスとエンゲルスとが正式に正義者同盟に加入したのは一八四七年一月のことであるが、其れ以前に於けるマルクス及びエンゲルスの思想的活動並に正義者同盟との關係は如何。

正義者同盟と兩人との關係は先づエンゲルスに依て結ばれた。一八四二年の晩秋、エンゲルスは故郷なるバルメンから英國のマンチェスターに移り、一八四四年まで引き續き此地に滞在した。

英國に到着したエンゲルスは間もなくチャアティストの首腦者やオオエン派の人々と親しく交る様になつた。そしてチャアティストの機關紙の『北極星』Northern Star やロバート・オオエンの『新道德世界』New Moral World に寄稿したり、ライン新聞や、瑞西の『共和主義者』Republikaner に通信を寄せたりする傍ら、經濟學の研究と英佛の社會運動の歴史の研究とに時を送つてゐた。併し何にも増して其頃の彼に影響を與えたものは、日夜目撃しつつあるプロレタリアの悲境と、其とは餘りに懸け離れた資本家の生活との對照、そして此の間に燃え上つて來る所の激烈な階級闘争の事實とであつた。そしてマルクスとルウゲが巴里で出版して居た『獨佛年誌』に現はれた『經濟學批判大綱』, Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie” や『E]里ノ・ルウヘン』, Pariser Vorwärts” に公にされた『英國の狀態』, Die Lage Englands” は斯かる事實の生々しい印象の下に書かれたものである。特に前者は社會主義に經濟學的基礎を與えんとした最初の試みであると云ふ點に於いて、今日でも尙我々の心を惹きつけるものであるが、其れに依て吾々は當時エンゲルスが英國の經濟狀態の研究から略々唯物史觀の本質を據る程に至つて居たと云ふ事を察する事が出来る。⁽⁵⁾

エンゲルスが倫敦で正義者同盟の有力分子 Schapper, Bauer, Moll と個人的交通を結んだのは正に此頃の事であつた。エンゲルスは、後年當時を述懐して云ふ、

『一八四三年、Schapper, Bauer, Moll の三人と倫敦で相識る事となつた。彼等は自分が識る事を得た最初の革命的プロレタリアであつた。當時の吾々の見解は互に相違して居たが——何となれば彼等の狹量なる平等共產主義に對して、自分は聊か狹量なる哲學的優越を持つて居たから——而も猶、自分は當時やつと一人前にならうとしてゐた時に當つて、是等眞實なる三氏から受けた感激的印象は自分の決して忘れ得ぬ所である』と。⁽⁶⁾

エンゲルスは是等の人々と面識の際、同盟加入の勸請を受けたが、きつぱり拒絶した。兩者の思想的相違に徴すればこの事は寧ろ當然である。正義者同盟との關係は實に此出來事を以て嚆矢とする。時に一八四三年であつた。

マルクスは一八四三年十一月、ライン新聞の筆禍を買つて祖國を追はれてパリ、に移り一八四五年一月迄此地に滞在した。一八四四年二月末、Arnold Ruge と共に獨佛年誌を起し、それに宗教の本質を説き、猶太人の解放を論じた二論文『ヘゲル法理學批判』『猶太人問題』を公にした。論文中

には、國家が市民社會を制約するものでは無く、市民社會が國家を制約するものなる事、更に政治及政治史は經濟關係及其發展から説明せらる可く、決して其反對では無いと論じて既に唯物史觀の口吻を洩し、猶太人の解放が同時に全人類の解放たる可きを論じて、靡ろ氣乍ら社會主義思想を吐露して居る。一方 H. Börsstein の發行する „Pariser Vorwärts“ に幾多の論文を寄稿したが、その中には、彼の社會主義思想が一段と明確の度を進めて居るのを見出す事が出来る。マルクス謂えらく「社會革命を政治革命と對立してゐるものと考へ、加之、社會革命に社會的精神を與えず、政治的精神を與ふるならば、政治的精神を伴ふ社會革命とは徹頭徹尾無意義の事である。或は政治的精神を有する社會革命とは、人が別に呼んで、政治革命若くは革命其者と稱するものの言替へに外ならない。總ての革命は夫れが社會的なる限り、舊社會を解體する。總ての革命は夫れが政治的なる限り舊權力を顛覆する。政治的精神を有する社會革命が無意義なるに反して、社會的精神を有する政治革命は合理的である。革命一般——現行權力の顛覆及び舊關係の解體——は一個の政治的行爲である。革命無くしては、社會主義の實行は不可能である。社會主義が破壊と解體とを要求する限り、斯種の政治的行動を必要とする。かくて社會主義の組織的活動が開始せられ、其の自己目的、其の精神の發現するに到て、始めて社會主義は其政治的被覆を脱ぐ」と。³⁾

一八四四年八月、エンゲルスがマンチェスターより故郷バルメンに歸る途中、巴里にマルクスを訪問し、互に意見を交換せし結果、端無くも、見解の全く一致せるを見出し、爰に四十年來渝る事なき友情が結ばれる事となつた。エンゲルスが英國の經濟狀態の研究から略々唯物史觀の本質を掴むに到つたと同様に、マルクスはフランス革命の研究から同一の思想的結論を導き出したのである。同年マルクスはエンゲルスと協力して、當時ヘゲル派の自由主義者 Bruno Bauer 辯駁書『神聖家族』“Die heilige Familie” を著してヘゲル及びフョイエルバッハ兩哲學を止揚して、独自の思想的高所に到達するに到つた。唯物史觀は略完成の域に近づいて居た。

當時、巴里は共產主義運動の檜舞臺であつた。マルクスは此地で獨逸の革命詩人 Heinrich Heine の親交を結び Bakunin や佛蘭西の社會主義者 Proudhon, Cabet と相識る事となつた。又巴里の正義者同盟の會員達とも交はるに到つた。當時、同盟の指導者はカベエ主義者 Ewerbeck であつたので、同盟も亦カベエの思想に支配せられて居た。マルクスは同盟に加入する事無く、唯だ獨逸手工業労働者の共產主義運動を興味の眼を以て傍觀してゐるのみであつた。何となれば、同盟の奉ずるカベエ主義とマルクスとの思想的溝渠は到底、彼の加入を許さなかつたからである。

一八四五年一月十一日、マルクスは „Pariser Vorwärts“ に發表した論文のために端無くもプロシヤ政府の忌諱に觸れ、同政府の要請に依りギゾオのために佛蘭西を追はれる事となつた。之が爲めマルクスは大陸に於いて比較的最も安全なる政治的避難地、白耳義のブルッセルに移つた。同年の春、エンゲルスはマルクスを追つて此地に來り、彼と會見した時、マルクスは既に唯物史觀の重要な部分を完成して居たので、彼等は之の新たな見解を基礎として各方面の事實を仔細に涉て研究する事となつた。⁴⁾

一八四五年の夏、マルクスとエンゲルスとは相携へて六週間の英國見學旅行を試みた。既に巴里

でマツカロック、リカルドオの研究に手を染めて居たマルクスは、此地で經濟學的文献を深く涉獵し既に資本主義の發達せる英國の社會状態を詳に觀察した。彼は又チャアティスト左翼の人々と接觸した。エンゲルスは、既に最初の英國滞在中、オオエンの機關誌 „New Moral World“ や O'Connor, Harney, Jones 等のチャアティストの發行せる機關誌 „Northern Star“ や其他の雑誌に寄書してゐたが、此際、舊交を温め、是等の人々と連絡を新にした。彼等が此時再び倫敦の正義者同盟の幹部と會見し彼等が豫てブリュッセルで計畫の共產主義通信委員會の英國通信員を同盟に委嘱した。マルクスがブルドン宛書簡の中で「吾々は既に英國と連絡を得た」といつてゐるのは此事實を指すものである。⁶⁶ブリュッセルに歸つて後、マルクスとエンゲルスとは再び共同の著述に着手した。即ち、Feuerbach、ブルノオ・バウエル、スチルナア等に依て代表さるゝ後期ヘゲル哲學を批評し、更に Grün, Hess 等の提唱する獨逸的社會主義を論評するために『獨逸觀念論』 „Die Deutsche Ideologie“ を著す事となつた。本書は實に唯物史觀の最初の形態であつた。

遮莫マルクス、エンゲルスは何時迄も單なる理論的活動に事足りりとなすものではなく、寧ろ彼等の目的は其實際的活動に存した。エンゲルスは其れに就いて自ら斯く言明して居る。

『吾々は當時、此新しき科學的結果を龐大なる書物に收めて、唯だ『學者の世界』だけに、囁かうなどの考は持つてなかつた。否、決して其れ所ではなかつた。吾々は二人共既に深く政治運動に参加し、殊に西獨逸の智識階級の間に相當の共鳴者を出し、又組織されたプロレタリアとは充分接觸して居た。吾々は見解を學問的に打建てる義務を有してゐたと同様に、吾々の信念に歐洲、殊に獨逸プロレタリアを引入れる事が吾々にとつて極めて重要なことであつた。』⁶⁷

マルクス、エンゲルスの活動は効を奏し、多數の急進主義者、共產者が相踵いでブリュッセルに集した。倫敦のワイトリング、瑞西の Sebastian Seier, シレシヤの Wilhem Wolff, ウェストフアアの Josef Weydemeyer, バルメンの Hermann Kriege 等夫々各地より前後して此地に到着した。又當ブリュッセルでは市立圖書館の古文書學者 Gigot, 勞働雜誌 „Atelier“ を發行する獨逸人 Heiberg 等の同志を得た。國外ではキールに Bürger, Jung, Damiel, D'Ester 等の同志を得た。

マルクス、エンゲルスは又英國チャアティストの首腦者達、殊に „Northern Star“ の主幹 Harney や佛蘭西社會民主黨の機關誌 „Reforme“ の主幹 Ferdinand Flocon 等と頻繁に通信を交換した。⁶⁸就中注目すべきは彼等が倫敦の正義者同盟本部及巴里正義者同盟の首腦 Ewerbeck と規則的に通信を行ふに到つた事である。是等の目的のためにブラッセルに『共產主義通信委員會』 „Das Kommunistische Korrespondenz Komitee“ を設立した。⁶⁹

マルクスが巴里通信委員として白羽の矢を立てたのは、當時既に知名の論客たるブルドンであつた。マルクスから入會勧誘の書簡を⁷⁰受取つたブルドンは、一八四六年五月十七日返事をマルクスに送るが、その書簡の中でマルクスが餘り性急で自説を狂信してゐる事を非難する。通信委員會加入の勧誘に對しては一寸考慮したのみで、事實上何等の述答を送らなかつたので、エンゲルスが之を確めるために態々巴里に行かなければならなかつた様な次第である。

此書簡を最後として兩者の友誼關係は斷たれる。即ちブルドンの「貧困の哲學」に對して完膚なき

批評を加へた事は、兩者友情を永久に断ち兩者は終生反目する事となつた。斯の如く當時ブラッセルは共産主義運動の中心地たるの觀があつた。

- (1) 嘉治隆一、後藤信夫、「マルクスとエンゲルス」二〇三—二〇四頁
- (2) Engels, a. a. O. s. 31.
- (3) Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels 1841-850. hrsg. v. F. Mehring. II. Bd. s. 59.
- (4) Engels, a. a. O., s. 35.
- (5) Nachlass. II. s. 332-333 Mehring, Karl Marx, Geschichte seines Lebens. s. 115. Grünberg, a. a. O., s. 12. Mayer, Friedrich Engels. Bd. I. S. 294. 英國通信委員會を同盟に依囑せし事は加盟を意味するに非ず。
- (6) 本書は出版書肆 Westphalen が契約を履行しないため公刊されなかつた。
- (7) Engels, a. a. O. s. 36.
- (8) Documente des Socialismus Bd. I, S. 218-224.
- (9) Grünberg, a. a. O., 13. 拙稿「新に発見されたマルクスのブルドン宛書簡」(財政經濟時報第十四卷十二)
- (10) 同上拙稿参照

六 正義者同盟マルクス、エンゲルスに傾く

思想的摸索の状態に在つた同盟をしてマルクス、エンゲルスの活動に着目するに到らしめた最も重要な原因は、一八四六年三月卅日のブリュッセル共産主義者會議席上に於けるマルクス對ワイトリングの軋轢と、同年五月、Hermann Kriege の言説に端を發した紛争とであつた。

一八四六年の初、ワイトリングは倫敦からブリュッセルに移つた。彼がマルクスのために懇ろに迎へられた事はエンゲルスも證明してゐるし、ワイトリング自身も之を認めてゐる。併し乍ら兩者の思想的相違は到底、友誼關係の永續を許さなかつた。同年三月卅日當地に共産主義者會議が開かれ、其の席上『獨逸に宣傳を行ふ最良の方法如何』の提案が討議せられたが、之に關しマルクスとワイトリングは激論を闘はし、遂にワイトリングの主張は敗北に歸し、爰に逸くも兩者の友情は破綻を見る事となつた。ワイトリングは會議の翌日、卅一日附 Moses Hess 宛の書簡の中で會議當日の状況を詳細に述べてゐる。曰く

『吾々は昨晚再び會合した。マルクスは、一人の男と一所に來て、之を露西亞人であるといつて紹介したが、⁽¹⁾ 此男は一晩中少しも口を利かなかつた。問題は『獨逸に宣傳を行ふ最善の方法如何』であつた。Seiler が之を提出して置いたのであつた。併し彼は今晚本問題の説明に這入る事は出来ない、他日仔細に述べる旨を聲明した。マルクスは他くまで彼に迫つたが無駄であつた。兩人は非常に興奮した。殊にマルクスは極度に興奮してゐた。遂にマルクスは自分で此問題を解釋した。其大要は斯うである。一、共産黨の刷新を行ふ事 二、其方法は黨内の不用分子を批評して、彼等に財政的援助を断つ事、三、此刷新は今日共産主義のために爲す可き最重要事なる事、四、會計方に権限を附與するだけの權力を有するものは又之に命令強要するの手段を有し、之を使用する事が出来る事、五、手工業者共産主義、哲學的共産主義を克服す可き事、感情は排撃しなければならぬ、それは單なる空想であるから。口頭宣傳、秘密宣傳の組織を作らざる事、將來に於いても亦一般に宣傳なる文字を使用せざる事、六、當初から共産主義の實現を問題とする事は出来ない。先づブル

ジョージイが羈権を握らなければならぬ。此點でマルクスとエンゲルスは激しく自分に反対した。Weydemeyerも又落着いて二三發言した。Gigot, Edgarは一言も云はなかつた。Heibergerは公平な立場からマルクスに反対した。到々仕舞ひにはSellerも同様の事と云つたが、驚く程落着いて、而も辛辣であつた。私は激昂した。マルクスは威丈けになつて、しまひには全く興奮して事務所の中を、あちらこちらと飛び廻つて居た。マルクスは私の筋書を見て殊の外怒つた。それで私は斯う云つてやつた。要するに吾々の議論で解つた事は、金力を持つたものは又言ひ度い事が書けるものだ云ふ事位であると。自分はマルクスの頭腦は立派な百科辭書かも知らないが、天才でない事を知つた。金持のお陰で編輯者になつたのだ。それ丈の事である。私は、各方面から反對に遭ふたので私の體系案を撤回した。之が賛成されなかつたのは、大勢が全く所謂刷新に傾いて居たからである。』⁽³⁾

此事があつてからマルクスとワイトリングの友誼は全く破綻してしまつた。嘗てワイトリングが初めて歴史的舞臺に現はれた時、此天才的プロレタリアを讚美し、深く理解した者は、實にマルクスであつた。然るを今は遂に彼と別るゝに到つた。

「此事件は單にマルクス對ワイトリングの個人的軋轢とのみ看過し去る事は出来ない。爰に共產黨の刷新とは勿論空想主義の排除を意味するものであると共に、『當初から共產主義の實現は問題とならず、先づブルジョアジョイが羈権を握らなければならぬ』の章句には唯物史觀に基く科學的社會主義とワイトリング其他の空想的社會主義の根本的相違を認める事が出来る。從て此事件はワイトリン

グ其他の空想的社會主義に對するマルクス思想の完全なる勝利を意味するものであると云ふ事が出来る。既に改造の氣運に向へる正義者同盟が、此事件のために、一入、マルクスの活動に括目するに到ると共に更に自ら思慮反省の機會を與えられた事は想像するに難くはない。

Hermann Kriegeはエストフリアの人、フォイエルバッハの學徒であつた。一八四五年二月、バルメンにエンゲルスを訪ふて彼に『卓拔なる煽動家』として認められ、その紹介でブラッセルに赴きマルクスと相識つた。四五年九月、正義者同盟の密使として紐育に赴き十月一日此地に同盟の「Gemeinde」を作つた。當時、紐育は未曾有の不景氣であつた。賃銀は法外に下り、労働者の騷擾が到る處に惹き起されてゐた。斯かる状態からしてクライゲの運動は獨逸労働者の間に忽ち勢力を扶植するに到つたのである。應て同盟は「Deutsche Jung-Amerika-Gemeinde」を稱するに到り、次いで四六年一月、機關雜誌「Der Volkstribun」を發行する事となつた。

クライゲは本誌で、労働者に害毒を及ぼす様な不羈奔放の兒戯に等しい空想を肆にして、共產主義を利己主義と對立させ、世界の革命運動は畢竟するに愛と憎、共產主義と利己主義の二句に盡さるものとなしてゐる。⁽⁴⁾而して本誌經營の費用を調達するために、自ら亞米利加に於ける獨逸共產主義の代表を稱して、寄附款願書を亞米利加の富豪に回送した。⁽⁴⁾

此一事がブリッセルに報道さるゝや、マルクス、エンゲルス其他獨逸共產主義者はクライゲの行為は明に同志を裏切るものとなし、同年五月、會合を開きクライゲ處分前後策を講ずる事となつた。會議の結果クライゲの除名を決議し、彼及び「Der Volkstribun」に對し、絶縁の聲明書を起草す

る事となり、マルクスの義弟 Edgar von Westphalen が其任に當る事となつた。聲明書に曰く『„Der Volkstribun“ 編輯人ヘルマン・クリイゲ君貴下

私は當地共産主義俱樂部の委囑に依り、且つは五月十一日會議司會者として貴下に對し、„Der Volkstribun“ に對する吾々の見解を表明せる、十一日起草の決議文を同封します。貴下が若し此決議文を故意に貴誌に發表せられなくとも、何れ歐羅巴、亞米利加で印刷されるでせう。貴下が右決議文を掲載せる貴誌„Der Volkstribun“ を下記名宛人 (Mr. Gigot, Rue de Bodenbrock, Nr. 8) に送附せらるるの一日一刻も早からん事を御待ち申して居ます。

ブラッセル、一八四六年五月十六日

Edgar Von Westphalen J^o

右決議文の全文は左の通りであつた。

- 『一、„Volkstribun“ に編輯者クリイゲに依て代表さるる傾向は決して共産主義では無い。
- 二、クリイゲが此傾向を代表するに用ひた幼稚で、仰々しい方法は、彼が自ら紐育の獨逸共産主義の理論的代表者と銘打つてゐる以上、歐羅巴並に亞米利加の共産黨を甚しく冒瀆するものである。
- 三、クリイゲが紐育で共産主義の名目の下に宣傳した奔放不羈なる感情的空想は、若し、勞働者に採用された曉は、必ずや彼等に甚しき害毒を流す可きものである。
- 四、本決議文並に其理由書を獨逸、佛蘭西、英國の共産主義者に通牒する事
- 五、本決議文並に理由書は„Der Volkstribun“ の次號に掲載す可き旨の要求を附して、同誌編輯

者に送附する事

右決議す

ブリッセル、一八四六年五月十一日

署名者 Engels, Gigot, Heilberg, Marx, Seiler, Westphalen, Wolf J^o

ワイトリングは、五月十一日の會議に出席して居り乍ら、唯獨り、クリイゲを庇護して決議文の署名に加入しなかつた。之がためマルクスとの關係は一層險惡に赴いた。五月十六日、彼はクリイゲに書簡を送つて此事件に對する自分の態度を説明した。是を機縁として彼はクリイゲから„Der Volkstribun“ の編輯人就任の招聘を受けたので、彼の思想が今や全く正義者同盟から顧みられざるに到りし折柄、進んでクリイゲの請に應じて亞米利加に渡つた。亞米利加に於けるワイトリングの共産主義運動は此時から始まるのである。

獨逸共産主義者の聲明書並に理由書は要求通りに„Volkstribun“ 二十三、二十四號に『一つの破門書』„Eine Bannbulle“ なる標題の下に掲載せられた。續いてクリイゲは同誌に數號に亘つて反駁文を掲載した。

一方、ブリッセルでは、マルクス及エンゲルスは決議文通りに、之に理由書を添付して英獨佛の共産主義者に回章を送達した。彼等は此回章でクリイゲの迷妄を逐一痛撃し、其害毒に感染するのを警告し、暗に正義者同盟を諷刺して、其覺醒を促した。同盟が此回章を受理して、慎重に自家反省の資に供した事は言ふを俟たない。今、クリイゲが正義者同盟の會員であつた事並に既に倫敦の同

盟本部と不和であつたワイトリングが此回章のために、マルクスと絶縁してクリイグと提携するに到つた事實に鑑れば、此回章が正義者同盟をして益々マルクシズムの理論に接近するに到らしめた最大の機縁であると考へられる。⁽¹⁾

之を要するに一八四六年三月三十日のマルクス對ワイトリングの確執、及び同四六年五月十一日のクリイグ問責事件は、既にワイトリング主義を脱離し乍ら、猶ほ遅々として、低迷してゐた正義者同盟をして遽かにマルクスの思想に近づかしたものである。後年、マルクスが『吾々は、同時に或は活版刷にし、或は石版刷にした多数の小冊を發行して、當時、同盟の秘密教義であつた佛蘭西英吉利の社會主義或は共產主義と獨逸哲學との混合物に對して忌憚なき批評を加へ、その代りにブルジョワ社會の經濟的構造に對する科學的洞察を唯一の依る可き理論的根據と定め、而して最後に、要は何等か空想的體系の實行に在るのでは無く、寧ろ吾々の眼前に展開しつゝある社會の歴史的變革に自覺して參加する事に存すると言ふ様な工合に、之を通俗的な形式で解説に努めた』⁽²⁾と云ひ又エンゲルスが『吾々は或は口頭で、或は書簡で又或は印刷物で同盟幹部の理論的見解の啓發に努めた。その上、當時形成されつゝあつた共產黨の内事に關する特別の場合には、各種の石版刷の回章を作つて、之を世界中の吾々の同志並に通信員に送附して之が鞭撻に力めた。是等に依て同盟は聽て覺醒するに到つた』⁽³⁾と言へるは何れも是等の事實を指すものであらう。

前記兩事件の後を承けて、爰に同盟は深く反省する所あり、此際、改めて同盟の態度を聲明し、陣容を一新して今後の運動に臨むことの最も得策なるを悟り、一八四六年十一月、宣言書を各同盟支部に向け發送し、同盟各員の輕舉を戒むると共に、鞏固なる結束と慎重なる反省とを促した。固り空想主義の徹底的淨化は望めないが、此等宣言書全文を通して同盟の歴然たる覺醒の跡は之を充分認める事が出来る。

右宣言書は全文十箇條に分つて述べられてゐるが爰では煩を避けて姑く其の最も重要な部分のみ解説に止むる。

宣言書は先づ、今後の運動方針を示し、全同盟の規準となる可き簡單なる共產主義信仰告白の必要を説き、之が協定のため四七年五月一日全同盟員の大會を開き、次で四八年には更に會議の範圍を擴張して世界中の共產主義者を招待して一般共產主義大會を開催す可きことを約定してゐる。曰く『歐羅巴殊に獨逸の現状を顧れば、總ての社會的、共產主義的思想が長足の進歩を遂げ、而も今日如何なる黨派と雖も、多かれ少なかれ、現行社會の變革を目指すに非ざれば何等の反響を受くるものではない』云ふ事は否む事が出来ない。今日、吾々が大規模の運動を捲き起し、力の及ぶ限り、之が指導に當るのは吾々の責務である可きであり、否責務であらねばならぬ。何となれば、吾々は是に依て始めて、力強き政黨を作り、首尾よく吾々の敵を屠る事が出来るからである。然るに悲しい哉、吾々は今日迄、此現状、換言すれば無秩序を克服するために一致協力した事がなく、其の方法に就いても結束を缺いてゐた。當初は、何等か共產主義的、社會的體系を提示して、運動しなければならぬと信じてゐたが、程無く、誤れる道を歩いてゐた事が分り、今や幸にも斯種の體系小賣業“Systemkrämerei”から遠ざかる事となつたのである。然るに猶一致結束を缺いてゐる。其譯は宗教的黨派、急進的ブル

シヨフに對する吾々の關係が明白でなく、全同盟員の規準となる可き、簡單なる共產主義的信仰告白が尙ほ提示されてないからである。之が爲めに各地方で協力しないで、却て互に拮抗する様な状態である。吾々は斯る醜態から救はれなければならぬ。是がためには書簡を以てしては到底不可能であるからして、一八四七年五月一日大會を召集する。……此大會は一八四八年に開く筈の一般共產主義者大會の豫備的會議であつて、一般共產主義者大會には世界中の新教義遵奉者を公式に招待する積りである。吾々は其時までには、形勢を有利に導くため一致協力の實を擧げん事を希望して止まぬ。第二節乃至第五節で各黨派に對する同盟の態度を述べてゐるが、是等は同盟の思想的變化を窺ふに極めて重要である。

第二節は急進黨に對する同盟の態度に就て述べてゐるが、同盟は必ずしも急進黨を排斥するものではなく、同盟の原則に牴觸せざる限り、寧ろ之と提携す可き事の却て得策なるを説いてゐる。曰く『嘗に獨逸に於いてのならず、白耳義其他の諸國に於いても、急進黨が公然と舊式淺薄なる自由主義から離れて、獨立の旗幟を樹立せる事は諸君の既に聞知せられてゐる所である。此政黨を組織せるものは主として増加しつつ、ある高級の金權貴族のために日々益々追詰められ、急速に、自己の衰滅に近づき來れるを目撃せる小ブルジョワジイである。彼等は社會改良に反對しないのみならず寧ろ其の必要なる事さへ公然と認めてゐる。プロレタリアが此黨派と接近する事は、今日の處、吾々の見る處では、望ましく、且必要である。吾々は吾々の根本原則に少しでも牴觸さへしなければ、是等の急進黨と、到處で提携す可きものと信ずる。吾人は、彼等も應てプロレタリアの伍列に追ひ落と

されるの目が決して遠くない事や、彼等が社會改良に依てのみ自滅を防ぐ事が出來る旨を、彼等に示すに努む可きであると信ずる。吾々が急進黨ブルジョワジイとプロレタリアの提携を圖る事が出來た曉には、歴史のみが之を證明した様な目醒しい、新時代の來る事は決して遠くはないであらう。其故に同胞よ、着手せよ』(三)

第三節及び第五節では同盟と宗教的黨派との關係を説いてゐる

『多數の共義生産者が獨逸の加特力教徒や賢者に繋いでゐた希望は、逆も實現されそうにも無い。吾々はそれに餘り望を囑してなかつた。老朽の建物を修理しやうと欲するのは無駄骨折である。其故に此迄かゝる事に努力してゐた人達を再び正道に引戻してやるがよい。吾々は古い物を餘り尊敬しない。吾々は精神と人間の心情とを拘束する舊世界の諸形式が、一所に新世界の中へ採り入れられるとは信じない。それは宜しくない事だ。

吾々は、基督教的—ゲルマン—プロシヤ的政黨に諸君の特別の注意を喚起し度い。プロテスタント的ジュネスイット教徒の中、是等の黨派に屬する人々は現今では頑迷固陋の輩である。彼等は自分の精神と拔殻同様の學説とで生氣潑瀾たる努力を打取る事が出來ないので、如何なる犠牲を拂つても民衆を奴隸状態に止めやうと決心して、到處で警察警察と呼號してゐる。そして若しそれが出來ないとなると、社會的原則を毀損するか又は是の學説の普及に努める人達を非難する事に依て、其目的を達しやうと努める。こんな輩の假面を剝いでやらねばならない。そして人々は彼等の赤裸々の姿を見て後すざりするであらう。彼等の全ての努力は、プロレタリアの間に信徒を作り、吾々

の離間策を講じ、變革の際には、國民軍を組織するに在る、恰も一七九二年エンデイ人が神と救世主の名を楯として正義の思想に挑戦した様に。……』⁽¹²⁾

次に第四節ではフリーエ主義に對する同盟の態度を述べてゐる。是は從來空想主義を奉じて居た同盟蟬脱の一過程として見る時、更に興味深いものがある。曰く

『吾々はフリーエ主義の行動に對し諸君の注意を煩し度い。そして是等の淺薄なる人間共が姿を見せるが最後、何處でも彼等に對し斷乎として諸君が反對せんことを望む。彼等は其自身だけでは危険ではないが、彼等は金を持ち、到る處に間諜を放ち、そして彼等は特に共産主義を打壞はさうと力めてゐる。それだから我々は最早是等の輩を大目に見逃す譯には行かず、公然と彼等を攻撃しなければならぬ。自ら真正の基督教徒を裝ふ彼等の笑止千萬の努力、彼等の軍事的組織、無数の法律、彼等の資本聯合、労働を愉快ならしむる事等は却て彼等をやつつける充分なる材料を提供する。彼等は愚にもフリーエ崇拜や自己崇拜に囚はれて、人類總ての生活關係に關する彼等の規則が、人類の自由を全く奪ひ、人類をは何の役にも立たない温室植物にしてしまふ事に氣が付かない。そして又現代の總ての努力が、蜘蛛の巢の中に腕いてゐる蠅の如く、腕けば腕くだけ益々強く吾々を束縛の中に陥し入れる様な無数の法律や規則の絆から脱するといふ事に向つてゐる事に氣が付かない。貧乏人は労働を愉快ならしむ方法を口にしては居るが、自然法に基く社會では、生活の實證たり、個人の實證たる労働は、實際の所、何等愉快なる手段を殊更必要としないで、労働其の者が總ゆるものの中最も愉快なものであるといふ事には氣が付いて居ないらしく思はれる』⁽¹³⁾

第七節では全同盟員相互の小註を警戒して、結束の鞏固なる可きを説いてゐる、

『諸君の間に存する總ての軋轢を一掃し、結束を固くして吾々共同の敵に對して戦ひ、而して統一は力を生ずる事を常に念頭に置かん事を望む。』⁽¹⁴⁾

最後の第十節で各同盟支部に對し、次に示すが如き三箇條の質問を提出して、之が考慮を促し、速かに應答すべき事を求めてゐる。

『問題一、プロレタリアートの上下級ブルジョワジイに對する地位は如何なるものであるか。

吾々の側から見るとき下級又は急進的ブルジョワジイに接近する事は望ましき事であるか、然らば何時如何なる方法を以てすれば、最も容易且つ安全に之を成就する事が出来るか。

問題二、プロレタリアートの各種の宗教的黨派に對する地位は如何なるものであるか。其の中の一つ又は他の黨派に接近する事は可能であり、望ましき事であるか。然らば何時、如何なる方法を以てすれば最も容易に且つ最も安全に之を成就する事が出来るか。

問題三、社會的共産主義的黨派に關する吾々の地位は如何なるものであるか。總ての社會主義者の一般的結合は望ましく、且つ可能であるか。然らば、何時、如何なる方法を以てすれば此結束は最も迅速に且つ最も安全に齎す事が出来るか』⁽¹⁵⁾

而して此三問は一八四七年二月の宣言書の中で再び提出された三問と共に同年六月一日の正義者同盟第一回大會に倫敦の中央本部が提出した共産主義信仰告白の原案の一部に採擇せられ又、後にエンゲルスの起草した『共産主義原理』, Grundsätze des Kommunismus の草案をなすものである

と云ふ點で特に重要な意義を有してゐる。

同盟の大勢を此處まで導いたものは固より、圏外に在つて不斷に叱呼鞭撻したマルクス及びエンゲルスの努力の然らしむる所であるが又同時に、他方同盟の中に在つて、夙に時勢の歸趨を看破して同盟刷新の急務を力説した爛眼の士 Karl Pänder 及び Georg Eccarius の賜である事を認めなければならぬ。⁽³⁾

Karl Pänder はハイルブロン Heilbronn 生れの密書家であつた。エンゲルスは彼を評して、彼は生來純粹の思索家で輕妙、皮肉に富み理屈屋である⁽⁴⁾と評してゐる。

Georg Eccarius はチュウリングゲン生れの裁縫人であつた。倫敦の正義者同盟をして瑞西のワイトリングの轍を踏ましめなかつたのは彼に負ふ所大であると稱せられてゐる。⁽⁵⁾彼の著「Der Kampf des grossen und der kleinen Kapitals」とワイトリングの諸著とを比較せば一見して此間の消息を了解する事が出来やう。固より思想的才幹に到つてはワイトリングに及ばなかつたが、それがために却て近世ブルジョワ社會の經濟的構造に對して深い洞察の眼を備へてゐた。彼はワイトリングの如く感情を弄ばず、感傷的、道德的批評に偏しなかつた。彼は近世の大工業の出現に依て手工業の消滅し去つた事を歴史的進歩と考へ、大工業の結果の中に、歴史その者に依り齎され、日々新に發生しつつあるプロレタリア革命の現實的條件を認めたのである。⁽⁶⁾

(1) 露西亞の出版業者 Annelow を指す。彼は一八八〇年露國の評論雜誌「Der Europäische Bote」に、此會議當日の模様を誇張の餘はあるが面白く描いてゐる。此文は一八八三年五月「Neue Zeit」に翻譯されて掲載せられてゐる。

- (34) Kater, a. a. O., s. 72-73.
 (35) Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. I. Bd. s. 30.
 (4) Mehring, Karl Marx, s. 124.
 (5) Hermann Schlüter, Die Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung in Amerika. 1907. 28-29.
 (6) Schlüter, a. a. O., s. 29-30.
 (7) Mehring, Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels. II. Bd. s. 342.
 (8) Karl Marx, Herr Vogt. (Oeuvres complètes de Karl Marx.)
 (9) Engels, a. a. O., s. 37.
 (10) Ernst Drahm, Zur Vorgeschichte des kommunistischen Manifests. Die Neue Zeit. 37. Jahrg. II. Bd. s. 132.
 (11) Drahm, a. a. O., s. 132.
 (12) Drahm, a. a. O., s. 133.
 (13) Drahm, a. a. O., s. 133.
 (14) Drahm, a. a. O., s. 134.
 (15) Drahm, a. a. O., s. 134.
 (16) Engels, a. a. O., s. 38.
 (17) Engels, a. a. O., s. 38.
 (18) Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. I. Bd. 350.
 (19) Mehring, a. a. O., s. 35.

七 マルクス及びエンゲルスの加盟

既に倫敦の正義者同盟は思想的に斯くまでマルクス及びエンゲルスに影響せらるるに至つたとは言へ、彼等に其實際の指揮までも仰がうなどは假初めにも考へては居なかつた。寧ろ一八四六年十一月の宣言書の齎す可き反響に多大の望を囑して、自ら改造後の同盟並に統一せる共産黨の支配權を一手に收めん事を潜に期待してゐたのであつた。

然るに、事實は同盟本部の期待を全く裏切つてしまつた。宣言書の反響は極めて少なく、同盟支部に要求した實狀報告も來らず、又提出した質問に對しても何等の音沙汰も無く、之がため各支部の意向全く判明せず、折角計畫した共産主義信仰告白の作成も覺束かない事となつてしまつた。又同盟の内部に於いても動もすれば結束を缺き、徒に個人的紛争に急はしく、同盟所期の目的に邁進するの氣概に乏しかつた。かくて倫敦の本部は今や、獨力を以てしては、所期の目的を實現することの到底不可能なる事を悟るに到つた。爰に至つて同盟本部は、頽勢を挽回するの道は今一つにマルクス及びエンゲルスの加盟を求むる外に無い事を痛感する事となつた。

一八四七年一月二十日、同盟本部は凝議の結果、遂に Moll をブリュッセルに派遣してマルクスの加盟を極力勸請するに決した。

モオルは命を受けて先づブリュッセルにマルクスを訪ひ、更に巴里にエンゲルスと會ひ、同盟の委任狀を示して、同盟の現狀を縷説し、之に對する兩人の意嚮を聴取すると共に、若し兩人にして加盟するときは同盟は潔く前非を改め、兩人の批判的共産主義を同盟の教義となす意嚮なる旨を説いて百方兩人の加盟を懇願した。豫て英國通信委員會を依頼し乍らも、尙ほ加盟懇請を斥けて、同盟の推移を觀望してゐた兩人も今は同盟の誠意を多とし、爰に同盟の懇請に應じて加盟する事となつた。此時、モオルの示した同盟の委任狀は Schapper の筆に成るもので全文左の通りであつた。

『ブリュッセル共産主義通信委員會殿

下記倫敦共産主義通信委員會會員は爰に同僚 Joseph Moll に、ブリュッセル共産主義委員會と協定を遂げ且つ之に對し當地の實狀に關する口頭の報告を致さしむる旨の全權を委託とを與えます。同時に吾々はブリュッセルの委員會が當地委員會會員たる同僚モオルに、總ての重要な問題に關する詳細な説明を與えられ、且つ彼に、倫敦委員會に取りて重要な事項を残らず託し下さらん事を希望します。

ロンドン、一八四七年一月二十日

Karl Schapper, Henry Bauer, Karl Pfänder, Friedrich Doepel, Albert Lehmann,
Charles Molly, Joh. Goebel』

後年エンゲルスは加盟當時の事情を述懐して次の如く書いてゐる。勿論多少誇張の嫌がある。

『慥か一八四七年の春、モオルはブリュッセルにマルクスを訪ね、それから直ぐ巴里の私の所に來た。そしてそれは彼等同志を代表して、私達に同盟加入を幾度も勸請するためであつた。彼等は既に吾々の見解の一般に正當なることを納得すると共に、同盟をば舊式な隱謀的傳統と形式から解放することの急務を悟つたのであらう。吾々が加盟を承諾しなへすれば、同盟大會の席上で吾々の批判的共産主義を一つの宣言の中で述べる機會を與えらるゝ筈であつたし又其宣言は同盟の宣言として發

表さるゝ事にもなる筈であつた。そして又吾々の力で同盟の陳腐な組織に代ふるに、時代と目的に適ふ様な新なる組織を以てする事が出来る事になる。

獨逸労働者階級の間にも既に宣傳のために一つの組織が必要であり、且つ此組織は單に地方的性質のものである場合は別として、縦令、獨逸以外でも秘密の組織でなければならぬ事に就ては吾々決して疑を差し挟まなかつた。而も今や同盟内にかゝる組織が既に生れたのである。従來吾々が同盟を非難してゐた點が今や同盟の代表者達自らが缺點だと氣附いて放棄されてしまつた。吾々自身が改造に協力する様懇請されたのである。吾々は否だと云へ様か。そんな事が言へる筈は無い。そこで吾々は同盟に加入したのである。マルクスはブラッセルで吾々の懇意な友人達で同盟支部を作り、自分は巴里で三つの支部を訪問した』⁽⁶⁾

加盟と共にマルクスはブラッセルの共産主義通信委員會を同盟の支部に變じ、エンゲルスは巴里の支部に止つて活動を續ける事になつた。又同盟本部では四七年二月、急遽宣言書を發して、曩に前年十一月の宣言書で大會を五月一日に開く旨を約して置いたのを一ヶ月延期して改めて六月一日に催す旨を通知した。二月の宣言書で『吾々は最初の書簡では既に五月の初めに共産主義者大會を招集する旨を通知して置いたが、其間に特別の準備を要する豫期せざる事情が起つたので、同期日を同年六月一日に延期するの止むなきに至つた』と云ふのみにて延期の具體的理由を擧げては居ない。或は一八四六年の凶作並に物價騰貴に依て惹起された飢餓一揆にフランスの共産主義者が参加したため迫害せられ、又其に伴ふて巴里警察の横暴にも歸因するとも云はれてゐるのが何れにしてもマルクス、エンゲルスの加盟が延期の最も重要な原因である事は想像するに難くはない。

一八四七年二月倫敦の同盟本部が第二回の宣言書を發して大會期日の延期を通知した事は既述の如くであるが、宣言書は先づ前回四六年十一月の宣言書の効果の面白くなかつたのを慨して再度の反省を促してゐる。曰く

『吾々は仕事に着手した時に、各方面から極力援助を受け得るものと期待してゐた。然るに吾々の期待は全く裏切られてしまつた。そして多くの方面からは一通の書簡も、一片の挨拶も受け取らなかつた。吾々は斯様な醜態は矯正しなければならぬ。今や政治的地平線上には、暗雲深く垂れ罩めて時代精神のごよめきが到る處に聞こえ、眼前には未曾有の革命を控へてゐる。今日の時代は徒らに墮眠を貪り、個人的優越の争に耽る可き時ではない、否今日人類は彼等鬭争者の何人も各々其義務を盡さんことを要求してゐる』⁽⁴⁾

宣言書は、次ぎに来る可き六月一日の共産主義者大會に議せらる可き議事日程の内容の大略を提示してゐる。

『吾々は先づ第一に吾々の事務報告をなし、吾々の事務を代表者の手に引き渡し、將來の本部所在地の決定を代表者に圖るであらう。

第二に、規約を根本的に改正しなければならない。人類は力強く前進しつゝある。自覺は萬人の胸に湧いて來た。それと共に又自由に對する努力も起て來た。だから吾々は愈々益々人類の欲求に加擔しなければならぬ。そして彼等の精神と矛盾する様な法律に従ふ可く彼等を強制せんと欲す

るものではない。

第三に、簡單なる共產主義信仰告白書を作成し、總ての歐洲語で印刷し、總ての國に普及しなればならない。これが特に重要な點である。だから吾々は諸君が其に關して、次下に示した様な問題を特に慎重の態度を以て討議し、之に依て吾々の眞意を明かにせん事を望む。

第四、總ゆる方面に向て、我黨を代表する雑誌の創設に付て一言しなければならぬ。公の機關雑誌を持たない黨派の存在し得ざることには諸君周知の事實である。其故に吾々は六月迄機關誌發行の運びに列る、様諸君が専心努力を惜しざる事を確信する。總ての代表者は各々自分の區域で幾部位賣捌く事が出来るかを知らねばならぬ。

最後に、組織宣傳のため各方面に旅行する代表者を任命しなければならぬ。其故に諸君は、獨逸やスカンヂナヴィヤに住んでゐて、今日迄その動靜の全く不明であつた人々の中、諸君の知れる姓名住所をば諸君の代表者に知らせて置いて貰ひ度い。此點や、諸君が大會に提議し度いと思ふ諸點に關して必要な訓令は、諸君の代表者まで傳へて置いて頂き度い』の

この中、一、二、四、五はマルクス及びエンゲルスの希望に添ふて提出されたものである。

次に最も重要なものは、前回の宣言書と同様に共產主義信仰告白の基礎となる可き問題を提出し各支部が慎重に考慮せん事を求めた事であつた。此際併せて前回提出の三問にも可成速に返答す可き旨を要求した。新提出の問題は前回同様三問から成れるものであつた。

「一、共產主義とは何か、そして共產主義者は何を欲するか。

二、社會主義とは何か、そして社會主義者は何を欲するか。

三、共產社會は如何なる方法に依れば、最も迅速に且つ最も容易に齎らされ得るか」の
而して同盟本部自ら此三問に對し、手引として次の如き説明を施してゐる。

『共產主義とは一個の體系である。其れに依れば地上は萬人の共有財貨であり、吾人は其能力に應じて勞働し、「生産し」、而して各人は其力量に應じて享樂し、消費す可きものである。共產主義者は總ての古き社會組織を顛覆して、其の代りに全く新なる社會組織を建設せん事を欲する。

社會主義は其名稱を「社會に關する」と云ふ意味の羅旬語 "socialis" に仰ぐものであつて、既に其名稱の示す如く、社會の編制や、人と人との關係を取扱ふものである。然しそれは決して新しき制度を計畫しやうとするものではなく、其仕事は主として舊い建物を修繕し、時の經過に依て生じた罅隙を塗り閉ぎ且つ隱蔽し、或は精々ナツエ主義者の如く古く朽果てた資本と呼ばれる基礎の上に新なる建物を築かうとするに在る。かく見れば、監獄建築屋、改良建築家、發明家、細民長屋、建築屋、施療病院建築屋、食堂建築屋も悉く社會主義者の中に數へ入れる事が出来る。社會主義なる言葉は固、決して明確な概念を表明するものではなく、因循姑息を意味するものであるから好んで手を出し度がるが實行の勇氣を持合せない淺薄な男達や、愛の陶醉者達が其旗下に集つて、最早かゝる古建築を修繕しないで全く新なる建築を打建て様とする共產主義者達を罵倒する。然し乍ら既に全く朽果てた社會組織を修繕し、糊塗することが時間空費である事は、物の分つた人間の誰しも容易に認める事であらう。それ故に共產主義なる言葉を墨守して、大膽に之を吾々の旗上に

掲げ、旗下に集まる選手を糾合する事が必要である。最近屢々耳にする所であるが、共産主義と社會主義とは本に於いて同一のものである、だから多くの淺薄なる思想家達から尙攻撃される共産主義者と云ふ名稱を社會主義者なる名稱に代へた方がよいではないかと要求されても、吾々は決して沈黙してならぬ、他くまでもかゝる無意義の主張に反駁しなければならない。

共産社會の導入に關して主要問題は、共産社會は直ちに持ち來されるか或は一つの過渡期を認めて此期間に先づ民衆を教育しなければならぬか、そして何時、如何なる期間此過渡期は續くことになるであらうか。

第二に、かゝる共産社會は大規模に持ち來される事が出来るか、そしてどうしなければならぬか、或は先づ小規模の試を企てなければならぬか、此社會を持ち來すには暴力を用ふ可きか或は變革は平和的方法を以て行はなければならないか。』の

而して此三問は一八四六年十一月宣言書の提出した三問と共に多少の補綴を加へられて來る可き六月一日の大會に本部の共産主義信仰告白案として提出されるに至つたと共に、既に述べた如くエングルスが『共産主義原理』の更に原案をなすものである。

遮莫、マルクス、エンゲルスの加盟は必ずしも同盟に伏在する總ゆる空想主義の一掃的除去を意味するものではない。従て直ちに同盟のマルクシズム遵奉を意味するものではない事は一八四七年九月シツバアの筆に成れる同盟機關誌「共産主義新報」校正刷の如實に示す所である。マルクシズム

の勝利は「共産黨宣言」の出版を俟たなければならない。

(1) Mehring, Der Bund des Kommunisten. Neue Zeit 29. Jahrg. 2 Bd. s. 66.

此點に關してはリヤザノフ(共著「マルクス、エンゲルス」)の異論あり。

正義者同盟がマルクス加盟を勧誘した時、實にマルクス其人の發意に基く組織が既に倫敦ブリュッセル、巴里に存在してゐたといふ彼の主張は全く正しいが、モオルがマルクス加盟勧誘にブリュッセルに來たのは既に存在しない「正義者同盟」を代表したのでなくして倫敦共産主義通信委員會を代表したので、マルクスの同盟の關係は受動的でなく積極的であるといつて、プルトン宛マルクスの書簡に典據を置いてゐるが、之は一應尤もらしい解釋ではあるが畢竟、索強附會の譏を免かれなと思ふ。成程モオル持參の委任狀には倫敦通信委員會とあるが、之はマルクスの歡心を買入とする政策的な手段であると思ふ。正義者同盟は決して消滅してゐたのではないのみか却て此同盟がマイヤアの示す様に彼等の委囑により一八四五年夏以來通信委員會の英國代理を行つてゐたに過ぎなかつた。代理は代理であつて同盟の自己消滅、マルクス、エンゲルスの合一を意味するのではないのである。事實モオルは正義者同盟の代表として來たのである。

(2) Engels, a. a. O., s. 38-39

(3) Grünberg, a. a. O., s. 18.

(4) Drahn, a. a. O., s. 135.

(5) Drahn, a. a. O., s. 135-136.

(6) Drahn, a. a. O., s. 137.

(7) Drahn, a. a. O., s. 137-138.

(8) Grünberg, a. a. O., s. 19.

X X X X X X X X X X

本稿は拙稿、『共産黨宣言』前史の一齣』の續篇をなすものであつて、正義者同盟の成立より、マルクス、エンゲルスの加盟までの史實を取扱つたものである。初め共産黨宣言の出版まで敘述する積りであつたが、既に豫定の紙面を超過したので此の部分は他日に割愛する。

本稿と同一問題を取扱つた我國文献に嘉治隆一氏の論文(雑誌『社會思想』、大正十三年三月—七月)がある。筆者の参考を仰いだ所が少くはなかつたが、餘りにクルンバルロの研究に忠實である様に思はれる。

(一九二七、二二、一七)

古代社會に於ける氏族制度と其の經濟單位に就て

山本勝太郎

茲に考究せむと欲するものは、『古事記』及び『日本書紀』が描き残したる、彼の傳説神話の時代に於ける經濟生活の狀態を推定する事に關聯して、當時の人々は、果して如何なる社會を組織し、而してその制度の下に如何なる經濟關係を結んで居つたかといふことに就てある。而もこれ甚だ興味ある研究にして、甚だ困難なる問題なれば、既に先考によつて幾多の推定行はれたる處なれども、未だ抱く處の疑問を解く事能はず、以下その疑問の湧く所を逐ふて、自ら問ひ、自ら答へて見たいと思ふ。

人この時代を稱して「骨の代^{ツボノキ}」といふ。骨とは即ち氏族の姓にして、もと氏族の首長の稱號なりしものが、遂に社會的地位階級を示すものとなつたのであるが、それら首長の下に屬する氏族こそは、實に此の時代の社會組織の根幹を爲せるものにして、氏族制度はわが古代社會に於ける凡ての社會現象を説明する基礎である。

氏とは何ぞや? 氏とは直系傍系の血族關係より成れる大家族的共同生活團體たる戸の多數を包括する一の同族團體の名稱である。而してこの戸は、單に婚姻關係に基く夫婦を單位とする個人的